

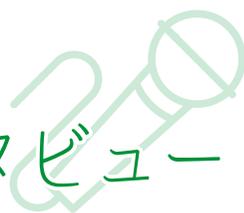
小樽のひとに学ぶ

【2018 年度版】



小樽商大生が

小樽のひとにインタビュー



はじめに

この冊子は、昨年度に引き続き、小樽商科大学の学生が地域の特徴や課題を検討する授業の一環として小樽在住の方にインタビューし、記事にまとめたものです。

お話を伺った20名の方は、様々な領域でご活躍されており、幅広い世代にわたります。本年度は、老舗企業や飲食店、文化芸術などに関わる方に加え、小樽生まれで小樽を一度離れて戻られた方や、小樽以外の地域から来られた方など、小樽の外部の視点をお持ちの方を含め、より多面的にインタビューを実施しました。

一方、インタビューした学生は、小樽のことをまだよく知らない1年生が中心で、学生たちはこのインタビューを通じて、小樽を学んでいきました。学生は、3〜4名のチームでインタビューを実施して、2500字程度の記事を作成しました。今回は、インタビュー内容を少しでも多く記事に盛り込むため、昨年度より500字程度増やしました。

多様な歴史文化が現在もまちの至るところに息づいている小樽を理解するには、小樽のひとから学ぶことが重要です。このインタビュー記事が小樽の魅力を再発見するきっかけの一つとなれば幸いです。

お忙しい中、インタビューを引き受けてくださった皆さまに、深く感謝申し上げます。

インタビューは、平成30年度の小樽商科大学の地域志向型授業（グローバルイズムと地域経済、担当教員：江頭進）および、本学のグローバルプロジェクトの一環として実施しました。授業のテーマは、主に昭和30〜40年代の小樽に関する歴史・社会・風俗・文化の調査を通じて、地域の特性や課題を洗い出すことで、大学で必要とされる課題発見力、社会調査法、そして正しい日本語の表現方法を身につけることを目指すものです。

授業は全15回で、小樽の特徴（歴史文化、社会経済）、取材方法、記事のまとめ方、フィールドワーク（小樽市内バスツアー）、ゲスト講師による講演とディスカッション（石川圭子さん・古民家 gallery 鴨々堂亭主、有田麻子・北海道新聞記者、平成30年6月20日）により、地域社会への理解を深め、取材と記事の作成方法を習得しました。

グローバルプロジェクトでは、シンポジウム「商店街のひとに学ぶ」都通りの歴史・現在・未来」を開催しました（平成31年3月13日）。基調講演の内容の一部を本冊子に収録しました。

本冊子の編集は、高野宏康（小樽商科大学グローバル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部・学術研究員）が担当しました。

インタビュー関連 MAP



- | | | |
|--------------------|----------------------|-------------------------|
| 1 FMおたる | 8 祝津漁港 | 15 富岡町のご自宅 |
| 2 東香楼 | 9 小樽市役所 | 16 レストランテ・トレノ |
| 3 小樽洋菓子舗ルタオ本店 | 10 叫児楼 (現・叫児楼二代目) | 17 雷除志ん古 |
| 4 五香飯店 | 11 忍路神社 | 18 消防犬「ぶん公」の像 |
| 5 信香町 | 12 都通り商店街の切り絵 | 19 南樽市場のキャラクター (みなみちゃん) |
| 6 小樽市生涯学習プラザ (レピオ) | 13 小樽市民センター (マリンホール) | 20 旧小樽倉庫 (現・小樽市総合博物館他) |
| 7 小樽稲荷神社 | 14 日本橋 | |

目次

はじめに	p03
インタビュー関連MAP	p05
チーム01 小樽のコミュニティFM (石橋八千代さん)	p06
チーム02 学生を見守り続ける中華料理店 (一安貞光さん、隆子さん)	p08
チーム03 「オタル」から愛される「ルタオ」へ (稲葉悦子さん)	p10
チーム04 小樽を愛し、小樽に愛される老舗中華料理店 (小関啓人さん)	p12
チーム05 さらになる小樽の活性化を目指して (海老名健さん)	p14
チーム06 小樽のまちと教育 (上林猛さん)	p16
チーム07 まつりとまちづくり (木村文彦さん)	p18
チーム08 激動の時代を生き抜いた祝津の漁師 (佐藤武利さん)	p20
チーム09 運河の変遷をみてきた市役所職員 (笹山時彦さん)	p22
チーム10 故郷小樽に捧げた生き方 (志佐公道さん)	p24
チーム11 鯉場の記憶を伝える (相馬義春さん)	p26
チーム12 切り絵を通して知る小樽 (高橋悦郎さん)	p28
チーム13 舞台裏のメエストロ 小さな町に世界的奏者が集う (高野るみさん)	p30
チーム14 小樽を「寿司のまち」に (中井ユウさん)	p32
チーム15 小樽にすむ哲学者・詩人 (花崎皋平さん)	p34
チーム16 鉄道車両を活用した イタリア料理店を経営して (比良嘉恵さん)	p36
チーム17 小樽最古の餅屋 (藤野戸秀勝さん・吉田久美子さん)	p38
チーム18 小樽の文化とまちづくり (水口忠さん)	p40
チーム19 小樽と芸術 (横山文代さん)	p42
チーム20 眠らないまち、小樽 (米林榮夫さん)	p44
基調講演 「商店街のひとに学ぶ」都通り商店街の歴史と未来 (鈴木創さん)	p46

小樽の「コミュニティFM

いしばし やちよ
石橋 八千代さん

元FMおたる、ギフト・オブ・ボイス



プロフィール

虻田郡真狩村生まれ。大阪芸術大学卒業後、関西地区で約2年間、フリーでテレビレポーターや司会業を務める。その後帰道し、平成7（1995）年からFMおたるの設立に関わる。専属のパーソナリティーとして活躍し、同23年から総合プロデューサーを兼任。同27年に独立。フリーに転身。現在でもFMおたるのパーソナリティー、地域イベントの司会業などを務め、小樽の地域活性化に貢献している。

「コミュニティ放送」は地域に密着した情報を発信するメディアであり、小樽にはFMおたるがある。私たちのチームは、FMおたる設立当初のスタッフで、当時から現在までパーソナリティーを務める石橋八千代さんにFMおたるや小樽のまちについてお話を伺った。

コミュニティ放送とは

「コミュニティ放送にはどのような特徴があるのでしょうか。」

石橋さん…平成7（1995）年の阪神淡路大震災で、震災情報や救済物資情報を伝達するために設立されたのが始まりです。その後、災害時の情報源として全国各地に設立されていきました。平成30年7月の時点で、全国に319局、北海道に21局あります。キーワードは「地域密着」です。FMおたるは小樽だけではなく、最近では同局のホームページからパソコンで聴くことができるようになりました。アプリをダウンロードしてスマートフォンでも聴くことができますよ。

FMおたるの創設

「FMおたるの創設にどのようなかたちで関わられたのでしょうか。」

石橋さん…FMおたるが創設されたのは平成8年5月1日です。株式会社北一硝子社長の浅原健蔵

とで、その人物の当時の心境や街の様子を想像することが小樽のまちの楽しみ方の一つだと感じています。小樽を訪れる観光客が国内外から増え、観光都市としてさらなる成長が求められている中、新しいものを創り出してアピールするもの良いですが、「歴史」という小樽本来の魅力をもっと全面に押し出した取り組みがあってもよいと思います。札幌との差別化を図るという意味でも、歴史を深く感じることができるようなまちづくりを目指してもよいのではないのでしょうか。

今後の活動

「FMおたるを退社されたとのことですが、今後の活動について教えてください。」

石橋さん…これまでFMおたるでパーソナリティー以外の仕事を兼任することで、営業や、プロデューサーとして人をまとめることなど、個人的に苦手なことにも挑戦することが出来ました。当初は「しつかりしなければならぬ」とプレッシャーを感じ、失敗しないようにと意識していました。しかし、苦手なことに取り組み続ける中で、自分を取り繕っていた何かがなくなり、ありのままの自分で伝えることが出来るようになりました。そしてより一層、自分は「伝える」ということが好きなのだと思えるようになったのです。FMおたるでの活動を通して、人間的に成長することができたと思いますので、FMおたるを卒業し、「伝える」仕事に集中することを決意しまし

さんが、小樽への恩返しがしたいということで出資してくださり、設立されました。私は、当時働いていたHBCの上司から、ローカルラジオに興味があるかという話を持ちかけられたことをきっかけに、FMおたるの創設に関わることになりました。設立当初はスタッフも少なく、自分自身で営業して、番組を作り、情報収集をしたりと、多忙の日々でした。

FMおたるの魅力

「FMおたるの魅力はどのようなところですか。」

石橋さん…FMおたるの魅力は、何といっても地域密着のラジオ局だということです。地域に根差した放送局ということですので、まちの情報は、商店街、市場、まつり、交通機関についてなど、幅広く取り扱っていて、とても細かい情報まで知ることが出来ます。また、番組を制作する際にも、聴いてくださっている方々からリクエストを受けて番組制作に反映させたり、番組に地元の人を招いて出演してもらおうということも実施しています。私自身も番組に地域のカラーを出すために、自分の足で取材先に行き、小樽の方々に会い、交流することでもいつも話題探しをしています。私の理念なのですが、インターネットからの情報を鵜呑みにしないで、直接自分が現場に行くことが大切だと思っています。

まとめ

「今回のインタビューで、石橋さんの小樽という土地に対する思い、そして小樽の人々とのつながりを持つこと、「伝える」という仕事が好きだという言葉が印象的であった。」

コミュニティ放送は学生にはあまりなじみのないメディアなのかもしれないが、地域を知ること、災害などの非常時には有力な情報源となるので、積極的に活用していきたいと思う。



FM おたる内でのインタビューの様子



FM おたるの番組表

チーム01
片桐光・山崎航輝・伊藤大志・太田一弘

今後の小樽について

「今後の小樽に期待することは何ですか？」

石橋さん…小樽の長所は、まちを歩く中で歴史を肌で感じられるところだと思います。小樽は歴史的な建造物がそのまま現存し、さらに様々な歴史上の著名人たちにゆかりのある土地です。私は当時と変わらない風景が広がる小樽のまちを歩き、そこにゆかりのある著名人たちに思いを馳せるこ

学生を見守り続ける 中華料理店

いちやす さだみつ

一安 貞光さん 東香楼店主
たかこ
隆子さん



プロフィール

一安貞光さん。昭和24年、芦別生まれ。小樽の有名中華店「真寿」で料理人を務めた後、同55年に独立。長橋で「東香楼」をオープン。平成14（2002）年、梁川通りに移転。地元住民や商大生に親しまれる中華料理店となる。小樽あんかけ焼そばは親衛隊に加盟しており、小樽商大江頭ゼミが発行する『あんかけ焼そば辞典』の作成に協力するなど、小樽の名物としてのあんかけ焼そばによる小樽の活性化の取り組みに貢献している。一安隆子さん。昭和26年、小樽生まれ。

とってはソウルフードで、当たり前の存在なので注文する際に「あんかけ」とか「焼そば」と言います。二方札幌や遠くから来た観光客は「小樽あんかけ焼そば」と注文するので注文の仕方で地元の人か観光客がわかります。ただ、来店した観光客が「小樽あんかけ焼そば（一）」と注文しているのを聞いて、今まで通り厨房に向かつて「焼そば（一）」と言うとお客さんから「焼そばではなく、小樽あんかけ焼そばをください」と訂正されることも多くなってきました。そのため、メニューを「小樽あんかけ焼そば」に変更したんですよ。

— 今後、小樽あんかけ焼そばをどのようにしていきたいですか。

貞光さん…小樽といえば寿司だけではなくあんかけ焼そばもあると言われるようになったのが嬉しかったです。今後は小樽以外の特に若者にも広く魅力を伝えていきたいですね。

商大生との交流

— 商大生とどのような交流があるのですか。

貞光さん…梁川通りに東香楼をオープンしてからですね。江頭ゼミが「あんかけ焼そば辞典」を作るという企画で初めて関わるようになりました。初めて取材に来てくれた商大生がお店を覗いた時、私の顔が怖くて帰ってしまったということもありましたね。緑丘祭であんかけ焼そばを提供することになると作り方を習いに来たこともありました。商大生だけでなく商大の職員や先生方も来てくれますよ。

— 商大生の印象について教えてください。

貞光さん…みんな爽やかですね。大好きです。中でも

私たちのチームは、梁川通りに店を構える中華料理店「東香楼」の店主である一安貞光さんと、その奥さんである隆子さんにインタビューをさせていただいた。あんかけ焼そばを提供するお店同士の協力や、小樽商大の学生との交流など、貴重なお話を伺うことができた。

これまでの歩み

— 貞光さんの経歴を教えてください。

貞光さん…出身は芦別です。中華料理店をやるといつていた先輩の話を聞いて面白そうだなと思ってついでに行った集団面接先で、千葉県の「東海楼」というお店に出会って料理人を目指すことにしました。20から30歳まで小樽の真寿で働いて、その後、長橋4丁目目22年間働きました。東香楼は17年目になります。

お店の場所を選んだ理由

— 東香楼をオープンする時に長橋を選んだ理由と移転することになったきっかけは何ですか。また、移転する時に梁川通りを選んだ理由は何ですか。

貞光さん…当時、長橋は店の前に国道が通っていて交通量がとても多かったからです。その後、国道の流れが変わって店の前を人が通らなくなってお客さんが減ったから移転することにしました。周りのお店もバタバタと閉店したり、どこかへ移転していききました。最初にガソリンスタンドが撤退しましたね。現在も残っているのは床屋と寿司屋くらいです。当時、店の周りにパチンコ屋さんが5店ありました。パチンコ屋にお弁当持って行く

応援団がよく来ますが、平成29年に当時の女性の団長さん（佐藤七海さん）はよく来てくれました。彼女のメールを店の中で聞かせてもらったこともあります。そのご縁で背中に「若人逍遙」の歌詞がプリントされた応援団トレーナーも持っていますよ。商大生が大好きだからサービスしたくなりますし、商大生を応援したくになります。翔舞は毎年年賀状を送ってくれますよ。そんな学生たちは特に応援したくなりますね。サッカー部が3部から2部上がった時、ご馳走したこともあります。商大生が食べに来てくれると何故かその人が商大生だとわかりますよ。商大生には良いイメージを持っているし大好きだから、こちらに来てくれればできることはなんでも協力したい。

「真寿」に勤めていた頃と現在の小樽の違い

— 「真寿」に勤めていた頃と現在の小樽の違いを教えてください。

貞光さん…私が「真寿」に勤めていた昭和45から55年の間、小樽は人口が約20万で景気も良かったです。観光地ではなかったですね。漁業も盛んでしたが、排他的経済水域のために漁業が衰退しました。それが人口が減った原因の一つだと思いますね。昭和62年に出来た寿司屋通りは宣伝しなくてもすぐ賑わっていました。今は人口が11万人程度になつて釧路や北見より少なくなつてしまいました。寂しいですが仕方がないとも思っています。小樽は給料が安くて若者は都会に行ってしまうのが、その気持ちはわかりますよ。

人なんてないでしょう？長時間パチンコやっていてる人はお腹が空いてご飯を食べにお店にくると思ったから梁川通りに決めました。

あんかけ焼そば親衛隊との関わり

— あんかけ焼そば親衛隊が発足する経緯を教えてください。

貞光さん…当時、北海道新聞記者の米林千晴さんが小樽のいろいろな店を行き来していて、あんかけ焼そばを出している店が多いことに気付いて、小樽のソウルフードとしてあんかけ焼そばを記事で紹介しました。その記事がきっかけで小樽あんかけ焼そば親衛隊が設立されることになりました。小樽中華調理師会9店舗に協力要請がありました。元々、小樽中華調理師会は仲良く組合員同士でイベントなどを企画していたこともあり、東香楼も親衛隊に参加しました。

— 手始めにその9店舗でスタン普拉リーを実施しました。加盟店全てのスタンプを集めると全店で使えるお食事券を贈呈するものです。このスタン普拉リーが非常に好評で、それを聞いた他のお店が続々と加入を希望し、2回目のスタン普拉リーの時には店舗数が24店舗になりました。その後も加盟店は増えていきました。すると各店舗に新聞やテレビ、旅行雑誌が取材に来るようになりました。

— 東香楼にはUHBの「グッチーの今日ドキッ!!」が平成23年4月26日に撮影に来ました。その結果、ゴールデンウィークを中心に番組を見た人が道内からたくさんやつて来ました。あんかけ焼そばは小樽市民に

まとめ

— 今回のインタビューで、東香楼が小樽で長年愛されている理由が理解できました。一安さんご夫婦が他の中華料理店と連携したり、地元の人や商大と商大生を応援してくれたり、地域とのつながりを大事にしているからだ。お二人に会いに商大生が小樽に来るとお店に来ることもあるとのこと、それに納得してしまうほどお二人の暖かさが伝わってくるお店だと感じた。



小樽あんかけ焼きそば



東香楼の店頭



「若人逍遙」の歌詞が記載されたトレーナー



インタビューの様子

チーム02
後藤智洋・山崎正之・盛拓磨・金澤駿

「オタル」から愛される「ルタオ」へ

いなば えつこ
稲葉悦子さん

小樽洋菓子舗ルタオ
販売二課熱狂的ファン創りチーフ



プロフィール

昭和28（1953）年、沙流郡日高町生まれ。高校まで日高町で過ごす。高校卒業後、当時の北海道簿記専門学校（札幌市）と、小樽商科大学の夜間主コースにダブルスクールで通学。別会社を経て株式会社ケイシイシイに就職し、事務職として勤務。平成7（1997）年、小樽洋菓子舗ルタオ販売二課で働き始める。ルタオ創業当初から20年間、「熱狂的ファン創りチーフ」として様々な企画に関わる。野菜ソムリエの資格を取得し、定期的に料理教室を開催している。

届いていましたね。創業当初の苦労があるからこそ喜びも大きかったです。また、ドゥーブルフロマージュを発送してほしいという要望があったので冷凍技術を開発し、製品を改良したところ、美味しさと好評価をいただきました。テレビで放送されたことがきっかけで人気になりました。

「熱狂的ファン創りチーフ」とは

「熱狂的ファン創りチーフ」について教えてください。稲葉さん…ルタオの母体である寿スピリッツ株式会社の経営理念の中に、「一日に熱狂的ファンを一人つくる」という理念があるんですよ。この理念にちなんで、「熱狂的ファン創りチーフ」という役職をいただきました。具体的には、紅茶の販売や料理教室を実施したり、新聞のコラムを書いたり、ラジオ出演など様々な活動に取り組んでいます。そういった活動すべてが「熱狂的ファン創り」につながっていくと考えて取り組んでいます。

印象に残っている「熱狂的ファン」はどのような方でしょうか。

稲葉さん…毎年来てくれる人がいて、親戚のようになっています。母の日にはいつもカーネーションを贈ってくれます。何かあったら東京からすぐ電話してくれます。「台風がすごいですね」とか（笑）。あと、LINEで「稲葉悦子ファンクラブ」をつくってくれているお客さんもいらっしゃいますよ。

私たちのチームは、小樽を代表する洋菓子店となった洋菓子店ルタオに創業当初から関わっている稲葉悦子さんにインタビューを行った。稲葉さんは、ルタオの「熱狂的ファン創りチーフ」として様々な企画やイベントを実施し、ルタオと地域を結びつける役割を担っている。ルタオの20年の歩み、そして小樽の変化についてなど、お話を伺った。

小樽にきた経緯

稲葉さんは日高町のご出身ですが、小樽にきた経緯を教えてください。

稲葉さん…高校までは日高町で過ごし、結婚後、小樽にきました。高校卒業後は札幌市の北海道簿記専門学校（現・札幌商工会議所付属専門学校）と、小樽商科大学の夜間主コースにダブルスクールで通学していたので、とても忙しかったです。結婚のため商大は中退しましたが、その後、別会社勤務を経て、後にルタオを創業する株式会社ケイシイシイに就職し、事務職として勤務していました。どのようなきっかけでルタオに勤務し始めたのですか。

稲葉さん…当時は堺町通りを通る人が非常に少なかったです。売り上げを伸ばす以前の問題として、お店にお客さん呼び込むために様々な取り組みを実施しました。牛乳券を配布したり、趣味の絵を店内に展示したりして、集客を図りました。

小樽市民への思い

多くの観光客がルタオに来店するようになっていますが、小樽とのつながりを深めることに尽力されている理由を教えてください。

稲葉さん…観光客にルタオをアピールすることと同様に、「地元の方が愛されること」がとても重要だからです。平成23年に東日本大震災が発生し、小樽に来る観光客が激減した時期がありました。が、地元小樽のお客様のおかげで、大幅な売り上げの落ち込みを回避できました。また、地元の方が観光客に「ルタオに行ってみて」と言ってくださると信頼感が高まりますよね。地元の方がルタオを観光客にお薦めしてもらえるように、小樽のお客様を大事にしていきたいと考えています。

まとめ

小樽にとどまらず、今や世界的に有名な菓子店となったルタオ。しかし、それは「ドゥーブルフロマージュ」のヒットだけでなく、創業当初から20年間に渡って築き上げてきた地元小樽の方々との関わりがあつてこそであるということがよく理解できた。これからも「オタル」から愛されることを目指す、「ルタオ」の様々な取り組みに注目していきたい。

ルタオと小樽をつなぐ様々な取り組み

ルタオと小樽のつながりを深めるためにどんなことをしていたのでしょうか。

稲葉さん…毎月3回、ルタオパトスでイベントとして料理教室を行っています。年配のお客さんも来ていたので、簡単に作れる料理を紹介したいと思いました。そのうち1回は、私が立ち上げた「ベジフル小樽しりべし」が中心となって行っています。ニセコ、蘭越など様々な地域の野菜ソムリエの方に来てもらっています。また、「小樽雪あかりの路」期間中には、韓国人、中国人と料理教室を開催しています。

また、「アイスドーム」の製作も実施しました。写真スポットとして多くの観光客から喜ばれましたね。ただ、街中は気温が高いため苦暑が多かったです。おおよそ100万円の費用を投じて実施した大きなイベントでした。

「ドゥーブルフロマージュ」のヒット

様々な取り組みを実施する中で、「ドゥーブルフロマージュ」がヒットしてルタオが全国的に有名になりましたが、その時はどのような様子でしたか。

稲葉さん…当時はルタオに電話が繋がらないという連絡を市役所が受けるまでの事態になりました。ファックスは百科事典くらいの厚さになるほど



経営理念手帳「こづち」
経営理念、困難に直面した時の
行動指針などが詳しく記載



インタビューの様子



ルタオ本店

チーム03
小西泰成・松永龍哉・屋宜宣寛・韓鎮奎

小樽を愛し、小樽に愛される 老舗中華料理店

こせき ひろと
小関啓人さん

五香飯店店主



プロフィール

昭和14(1939)年、札幌生まれ。小樽緑陵高校現・小樽未来創造高等学校 卒業。高校時代はバレー部の主将として活躍。北海学園大学に進学し、勉強とラグビーに励む。大学卒業後、渋谷や福岡で料理の修行を積む。同43(1968)年、小樽で中華料理店・五香飯店を開業。体力の衰えから平成28(2016)年6月に閉店するも、体調の回復や娘さんの力添えにより同年12月に再開。その後は日常的に運動して体力を維持するようしている。

五香飯店のメニューとは

「お店のメニューについて教えてください。」
小関さん…たくさんあるメニューの中で、餃子が特に人気ですね。餃子は皮から手作りしています。作り置きはせずに注文を受けてから妻が作っています。また、餃子の皮は季節によって状態が変わってしまうので、気温の高い夏には少し生地を固くしたりして、同じ味が保てるように工夫しています。他にも、昔から変わらない味を護るために原材料の仕入れ先をあまり変えないようにしていますし、レシピも変えていません。また、五香飯店の料理の中には「豚の耳」や「豚足」など、他の小樽の中華料理店ではあまり見かけないメニューも入れています。メニューは福岡で修行していた頃から、小樽の人がどのようなものを好むかを考えていました。お客さんに美味しく良い料理を提供するために好みを考えることは大切なんですよ。

五香飯店のこれから

「今後の目標はありますか。」
小関さん…私はもう80歳近くなり、重い中華鍋を持ち続けたり、ずっと厨房に立っていることが体力的に難しくなってきました。今から新しいこ

私たちのチームは、小樽の中華料理店「五香飯店」の店主である小関啓人さんにインタビューを行った。老舗ならではのこだわりや、お店に足繁く通った商大生の先輩のことなど、貴重なお話をお伺いすることができた。

五香飯店開店の経緯まで

「小関さんが五香飯店を始めるまでの経緯を教えてください。」
小関さん…私は昭和14(1939)年4月、札幌で生まれました。その後一度、浦臼に移ったのですが、小学校5年生の時、家族全員で小樽に引っ越しました。小樽緑陵高校(現・小樽未来創造高校)を卒業し、北海学園大学に進学しました。元々、私は料理人になりたかったので、卒業後、叔父が働いていた渋谷の中華料理店で修行を積みました。その後、福岡に行って、当時、日本で最も大きいと言われていた龍鳳という中華料理店で働きたかったのですが、立地があまり良くないと思いました。そこで、2番目に大きいと言われた平和楼という店で中国人や台湾人に囲まれながら働きました。30歳で独立してお店を開こうと決めていたので、30歳の誕生日の前日に小樽へ戻り、五香飯店を開店したんですよ。

とを始める余裕はありませんが、娘や妻のちからを借りながら、昔から五香飯店に来てくれているお客さんや商大生のために、少しでも長くここで料理を作り続けたいと思っています。たとえば料理の作り方や材料が同じでも、私が作らないとどうしても味が変わってしまいますからね。

まとめ

「今回のインタビューを通して、五香飯店が三度移転し、一度閉店しても、多くのお客さんに愛され続けているのは、店主である小関さんが何よりもお客さんのことを考えて料理を提供し続けていることにあることがわかった。テレビ局から取材依頼があると、いつも来てくれるお客さんに迷惑がかかるといけないということも断っているとのことである。80歳を目前にしてもお店に来ない日はなく、定休日でも朝から仕込みに勤しみながら私たちのインタビューに答えてくださったが、その姿からもお店に並んでくれるお客さんを大切にしている姿勢が伝わってきた。商大生との交流も長く続いているが、「昔から商大生には良い印象しかないですね」とおっしゃっている。現在、在学中の商大生は五香飯店を

開店後の様子

「開店した後はどうでしたか。」
小関さん…昭和43年5月1日に五香飯店を開店したのは松竹ボウルの近くでした。しかし、より栄えている場所に店を構えたいとなったので、同年3月1日に花園銀座商店街に移りました。最初はモナークという喫茶店を引き継いだのですが、合わなくて1年ほどで中華料理店に戻しました。移転後はお店が大きくなったこともあり、たくさんのお客さんに恵まれました。特に商大生がたくさんきてくれましたね。朝までお酒を飲み明かしていました。以前の店舗内には商大生が書いた落書きがたくさんありましたよ。今でも学生時代に来てくれた方が食べに来てくれるのは嬉しいです。歳を重ねて体力が衰えてきたので、平成28(2016)年に一度閉店することにしたのですが、次女がお店を手伝ってくれることになりました。私自身も元気になってきたこともあり、その年の12月1日にお店を嵐山通りの近くに移転して再開することになりました。ちなみに、お店を開店したり移転する日付は全て1日に統一して覚えやすくしています。

知らない学生が多いが、もつとこのお店のことを知ってほしいと思う。在学生とも新たな交流が生まれることを願っている。



愛用の包丁とフライパン



現在の五香飯店



インタビューの様子

チーム 04
佐野侑也・東花苗・荒巻美帆・有塚恒

さらなる小樽の 活性化を目指して

えびなけん
海老名健 さん

(株) 北海道銀行社外監査役



プロフィール

昭和21(1946)年、岩見沢市生まれ。函館ラ・サール高校、早稲田大学第一政治経済学部卒業。同45年、住友海上火災保険(株)に入社、札幌支店(配属)同52年、東京本店へ。平成9(1997)年、取締役役人事部長、常務、専務を経て、同18年、三井住友海上火災保険(株)取締役副社長に就任。同20年、社長退任後、小樽市に転居。同24年、(株)北海道銀行社外監査役に就任。現在に至る。同26～30年、小樽商科大学地(知)の拠点整備事業外部評価委員を務めた。

た、リビーターを増加させる方法についての検討が弱いように感じられます。「食」の分野については大いに工夫が必要だと思っています。

— 小樽観光をより活性化するには何が有効でしょうか。

海老名さん… 歴史的建造物の活用は非常に有効だと思います。また、明治以降、150年の歴史の中で栄枯盛衰を経験してきた小樽の姿を記録した写真やフィルムがたくさん残っていますので、その歴史を辿ることが出来ます。歴史的建造物と写真・映像という2つの遺産をつないでいくことでいろいろな小樽のストーリーが見えてくるのではないのでしょうか。それを個々の建物や映像を線的に展開していくことで小樽の歴史を感じさせる通りが生まれるはずですが、また、歴史的建造物を守ろうとする団体が林立したことがありますが、そのことで力が分散してしまっているようにも思われます。

さらなる小樽の活性化を目指して

— 小樽を発展させていくための鍵は何であると考えますか。

海老名さん… やはり観光振興は大きな柱となるでしょうね。「北前船」が日本遺産に追加認定されたのは喜ばしいですが、小樽独自のストーリーでの日本遺産認定を目指してほしいです。また、小樽市はかつて石炭の積出港でしたから、空知の炭鉱遺産と連携して日本遺産登録を進めるべきだと思います。小樽市単独では財源的に困難なこととも可能になると思います。旧日本郵船小樽支店や手宮線

情報社会化の著しい日本、そして少子高齢化の進む小樽。私たちはいま「グローバル」と「ローカル」の両方に向き合っていかなければならない。小樽のような地方都市を活性化していくためには何が必要なのだろうか。私たちは、三井住友海上火災保険(株)取締役副社長を務めた後、小樽に転居し、小樽の活性化に強い関心を持つ海老名健さんにお話を伺った。

昭和の小樽について

— 海老名さんの子どもの頃、昭和30年代の小樽はどのようなまちだったのでしょうか。

海老名さん… 私が小学生から中学生にかけて、生まれ育った岩見沢から小樽へ2度来たことがあります。当時、小樽は人口20万を越えようという頃で、「大都会でした。小学校の見学旅行では小樽のゴム会社や製菓工場などの高い煙突から煙がモクモクと出ている工業都市であるというイメージが今も強く脳裏に焼き付いています。家族で北海道大博覧会の祝津会場にも行きました。当時、子どもだった私は運河問題のことは全く知りませんでしたし、将来自分が小樽に住むことになるとは考えてもみませんでした。

小樽へ来た経緯と会社員時代

— 小樽に移住した経緯を教えてください。

海老名さん… 故郷である北海道の気候、風土がとても好きで、戻ってくるのは既定路線でした。職場結婚した家内の実家が小樽で、義父母の介護もあり、役員退任後、直ちに小樽に引越してきました。

跡地などをしっかりとお金をかけて整備すれば、ぐっと小樽の魅力が増すと期待しています。もう一つの柱は、高齢化社会を逆手にとることです。例えば、元気な高齢者のモデル都市を目指すなど、コンパクトシティ化して効率的な介護施設を中心部に持ってきて雇用を創出するとか考えられるかもしれません。

商大生にできること

— 海老名さんは小樽の活性化のために商大生に何ができると思いますか。

海老名さん… 地域活性化に必要な人材として「よそ者、若者、ばか者」という言い方がありますが、文字通り若者としてしがらみにとられない発想や発言を期待します。語学力や海外の人たちとのコミュニケーション能力の向上も大切です。高度な語学力は商大の伝統ですし、将来に向けての必須能力でしょう。ネットだけを情報源としていては視野が広がりません。新聞も情報源とすべきです。いろんな分野の方々との交流も重要ですし、歴史・哲学・文学などの本を読めるのも今のうちです。これらの積み重ねが、将来、個人の能力差となつて出てきます。

まとめ

— 今回のインタビューを通して、海老名さんが育った昭和30年代の小樽と現在の違いを知ることができました。また、これからの小樽の活性化のために商大の

— 会社員時代はいかがでしたか。

海老名さん… 40年近い会社生活では、かなりのモータリ社員だったと思います。悩み抜いた後に初めて活路が開けたということが多かったですね。その際、「案ずるより産むが易し」「窮すれば通ず」という2つの信条を大切にしてきました。また、社内外を問わず人の縁に恵まれたことも大きかったと思います。

小樽の魅力とは

— 小樽の魅力と強みはどこにあると考えますか。
海老名さん… 小樽の隠れた名物や食べ物といったも特に思い浮かびませんね。隠れた観光名所としては、小樽公園裏のロータリーの白樺林がいいです。運河プラザ前の消防犬ブン公の像もいいです。小樽は坂めぐりが楽しいです。手宮の「励ましの坂」、「地獄坂」、「船見坂」などたくさん魅力的な坂があります。そして、冬から春にかけての雪を頂いた暑寒別山系の素晴らしい眺望ですね。

小樽の「惜しい」ところ

— 現在の小樽について、課題だと思うことがあれば教えてください。

海老名さん… 小樽に転居して以来10年の間、ずっと小樽市と議会、経済界の関係がぎくしゃくしてしましました。小樽の発展のためにやるべきことは沢山あるのに、とても歯がゆい思いです。まさに小樽の「失われた10年」です。観光面に関しては、将来像、すなわちグラウンドデザインが欠けているのではないのでしょうか。ま

掲げるグローバルな視点が大切だということが分かった。小樽の観光については、歴史的遺産単体の紹介ではなく複数のものを上手く組み合わせるストーリーとして紹介していくことがポイントであることが分かった。学生も1年間の活動の中で成果の検証やPDCAサイクルを意識することが大切だということ。海老名さんの指摘は大変参考になった。



海老名さんの自宅



インタビューの様子

チーム 05
石栗巧哉・石丸智菜・伊藤駿・稲垣颯人

小樽の街と教育

かんばやし たけし

上林 猛さん

元小樽市副市長、元小樽市教育長



プロフィール

昭和23(1948)年、江差町生まれ。同47年、北海道飲料株式会社就職。同48年、北海道立栗山高校事務職員となり、同51年より北海道教育庁で勤務。平成15年(2003)年、北海道教育庁後志教育局長。同23年、小樽市教育委員会教育長に就任。小樽潮まつりでの市内全小学校の練り込み参加推進や小中学生の学力向上に尽力した。同28年、小樽市副市長に就任し、翌年辞任。その間、小樽市の日本遺産事業を推進し、同30年5月、小樽市は北前船日本遺産に追加認定された。

私たちのチームは、小樽市教育委員会教育長や小樽市副市長などを歴任された、上林猛さんにインタビューさせていただいた。これからの小樽をどのような街にしていきたいかという思いなど、詳しく伺いすることができた。

小樽の教育を変える覚悟

―平成23(2011)年に教育長として小樽に着任した時の第一印象はどのようなものでしたか。
上林さん…古い体質だなという印象を受けました。教育長になって驚いたのは、とても権威主義的で、必要以上に肩書きや前例踏襲、力のある人の言うことになびいてしまっていて、新しいことにチャレンジしない雰囲気がありました。また、小樽は全国一と言っているほど教職員組合の力が強いことで有名で、教育改革を拒否する体質があります。私が教育長に就任する時に一番気になったのは、その改革を自分ができるのだろうかということでした。古い体制をどのように打破していくかということが教育長として最も重要な仕事だと思って覚悟を決めました。この時、一番役立ったのは23歳の頃、約1年間働いていたペプシコーラでの経験ですね。民間企業で、何かに頼る前提を作るまでどのような工夫があるかを学びました。公務員というのは頼まれたらやるということが多いのです。何かを成し遂げようと思った時、待っていたらできません。自分から何かアクションを起こす必要があります。

人を変えるきっかけ作り

―教育長時代に苦勞したことは何でしょうか。
上林さん…学力向上が大きなテーマの一つでした。小樽は全道平均に満たないほど学力が低いのです。学力を上げるためにはどうすればいいか。勉強すればいいんですが、なぜしないのか。勉強の必要性を感じていないのではないかと。では、かんじさせるためにどうしたらいいのか。子供たちになぜ勉強しなければならぬのか、勉強することで何が変わるのかをしっかりと伝える必要があります。こうやってどんどん遡って考えていきます。人を変えるのは強制的に変えるのではなく、変わろうとするきっかけ作りを大人たちが見守っていくことが大事なのです。つまり、大人たちがどうやってさりげなく異にはめるかということですね(笑)。小樽ほど教育資源に恵まれた街はないと思いますよ。海があり、山があり、古い物も新しい物もある。人材も豊富だと思います。しかし、一つになることがなかなかできないので、もつたいないと思えました。それで、きっかけ作りとして音読選手権やポエムコンクールを開催しました。私は学力の基本は国語力だと思っています。まずは小学校で国語力をしっかりと身につけることが大切です。

小樽の特徴を生かしたまちづくり

―副市長に就任された時、小樽をどんなまちにしたいと思いましたか。
上林さん…小樽の特色は古いまちだということ

まとめ

―今回のインタビューを通して、たくさん経験を積むことの大切さを知ることができた。飲料会社や、道職員、小樽市教育長、小樽市副市長というさまざまな役職に就任した際に、強い信念を持っていたと語っていたことも印象的だった。私たちも自分たちのやりたいことを大切にして、信念を持って取り組んでいきたいと思った。

す。いわゆる歴史と伝統です。これを守っていくのが大切だと思います。古い建物を残して活用していく必要があります。そして小樽の文化を継承し、生活の中に生かしていくという意識のある人間を増やしていくことが大事です。自慢できる小樽をみんなが知らない、本物の伝統を守ることになりません。また、働くのは札幌で、小樽でゆつくり日常生活を送るというように、小樽はベッドタウンでいいと思います。小樽に帰ってくるのとほっとして、小樽に家があることが自慢できるような、東京における鎌倉のようなまちにしたいですね。もう一つは高齢者が働ける場があるべきだと思います。放課後、学校に高齢者が来て、そこで子供たちの世話をします。有料だと高齢者たちは喜んでやると思いますが、若者や子育て世代の定着にあえてこだわる必要はありません。若者は夢を見て大学に行くでしょう。それが地元にならないということ、嫌いなわけではない。夢を追いかけられることをしっかりと尊重する必要があります。若者は目指すことに挑戦して、失敗したら戻ってこいっていうことですね(笑)。それをちゃんと受け入れるまちにしたいですね。

最もやりがいを感じた仕事

―教育長や副市長などいろいろな役職を勤められてきましたが、一番やりがいを感じたのは何でしょうか。
上林さん…やはり教育改革です。長い間閉ざされていた小樽の学校を、風通しをよくしたと思っていま

す。外部からの様々な人に学校を開放して見てもらえるようになりました。まちの行事に子どもたちが参加するようになりました。教育界は資格の世界です。試験に合格しないと教諭になれません。かつては資格を持つ先生たちは、親が口を出すという世界でした。大学へ行くのは病院か大学の先生だったんですよ。それだけ尊敬されていたこともあって、逆に任せられたということもあります。ところが今は学校の先生より自分の親の方が高学歴だったりします。資格だけでは通用しないので、先生はやるうとして、いることを世間に説明しなければいけません。説明責任があるのです。しかし、小樽ではなかなかできません。現在の社会では人に説明して理解を得ることが基本なのです。

商大生に期待すること

―これからの若者、商大の学生に何か期待することはありますか。

上林さん…私は必ずしも商大の卒業生が小樽に残る必要はないと思っています。自分が叶えたい夢、やりたい職業をどんどん実現させてほしいです。その上で、小樽のまちで学んだことが他の場所で評価されるかもしれないという感覚を持ちつつ働いてほしいですね。そうすることで、結果的に小樽はどんどん発展し、商大の影響力も大きくなると思います。



インタビューの様子



インタビュー場所となった小樽市生涯学習プラザ(レビオ)

チーム06
稲葉紀花・植田遼・上野奏実・及川恵理

まじりりとまちづくり

きむら ふみひこ
木村文彦さん

小樽稲荷神社宮司
おたる潮太鼓保存会会長



プロフィール

昭和20(1945)年、中標津町生まれ。地元の中標津高校を卒業後、父が宮司を務めていた神職を志して國學院大学文学部神道学科に入学。同43年、神職の資格を得し卒業後、中標津へ戻り、中標津神社禰宜に任命されて神職としての仕事を始める。数年務めた後、中標津町の計根別神社兼務宮司に就任。同56年、小樽稲荷神社宮司に就任。小樽近郊の恵比寿神社、能島水天宮、忍路神社の兼務宮司を務める。小樽潮太鼓保存会の会長も務めており、市内各所のイベントや公共施設などでの打演をはじめ幅広く活動を支援している。

所で練習し、小樽の人たちとのつながりを大切にしながら打演活動が続けています。

手宮まつりについて

—手宮まつりの特徴を教えてください。
木村さん…手宮まつりは神輿を一晚十間坂に置くという珍しいまつりです。露店がたくさん出ている十間坂で、地元のみなさんに間近でお神輿を見てもらうためにこのようなことを行っています。ちなみに予算的な問題から、一時は神輿を一晚十間坂に置かないで、神輿を日帰りさせたことがあります。が、地元のみなさんから伝統的な行事はそのまま続けていくことが大切だという意見が多かったです。現在も一晩置くという伝統は続いています。

—手宮とはどんな地域でしょうか。
木村さん…手宮はかつて遊郭があつたこともあり、とても賑やかだったまちでした。かつての繁栄を少しでも復活させようということで、町内で協力して「手宮活性化〜てみや317〜」というプロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトに参加しているみなさんはお祭りに協力的で、ステージの設営なども含め、まつりの仕事を手伝ってくれますので、本当に助かっています。手宮はとも歴史が深い地域で、鉄道からはねる火の粉が

私たちのチームは、手宮の励ましの坂を登つた先にある小樽稲荷神社で宮司を務める木村文彦さんにインタビューさせていただきました。宮司として社務や祭事を通じて手宮をはじめ小樽の人たちと深く関わっているだけでなく、小樽潮太鼓保存会の会長として小樽の地域文化の振興にも尽力している木村さんから、様々なお話を伺うことができました。

神社の祭事と潮まつり

—祭事にはどのような意義があるのでしょうか。
木村さん…小樽稲荷神社例大祭では、御分霊を神輿に連れて担いで歩き列を作りますが、神様に一般の人の生活を見てもらうという意義があります。また、「直会(なおらい)」という行事がありますが、これはお供え物をいただくことと同様に、お祭りの後に神様と同じ物を食べて楽しく過ごして、みんなの健康を祈り、商売繁盛を願うという意義があります。神社の祭事ではありませんが、手宮まつりでは商大生もボランティアとして参加してくれますので、積極的な学生たちが協力してくれるのはとても嬉しいですね。

—おたる潮まつりはどのような祭りなのでしょうか。
木村さん…潮まつりは市民まつりですが、手宮まつりとはまた違う性格を持っています。小樽で最も大

木造の家についてしまうことによる火事が多かったため、昔からしつかりと消防団が発達していました。またかつて手宮公園に桜を植えた事など、昔の手宮の歴史を集め若い世代に伝える「手宮同志会」という会もあります。

まとめ

—木村さんは、長く続いている小樽稲荷神社の宮司として神社を守る一方で、小樽に住み始めてから手宮を中心に地域の人々と深く関わる活動に取り組んできました。主に宮司の普段の仕事と神社の祭礼、稲荷神社の成り立ちから北海道、全国の神社について詳しく教えてください。また、木村さんが会長を務める小樽潮太鼓保存会の活動や、手宮のまちについても詳しくお話ししてください。観光パンフレットやインターネットでは分からないような魅力を知ることができました。魅力だけではなく、若年層の減少によりまちに活気がなくなつたことや、家族で神社を運営する大変さなども教えてください。潮まつりが近づいているお忙しい時期に取材させていただいたにもかかわらず、あまり小樽に関する知識がない私たちにわかりやすく、神社や祭り、手宮地区について楽しそうに笑顔でお話ししてくれた印象がとても強く残っています。

きな祭りですが、神社の祭礼とは違う魅力があると考えています。潮まつりでは、地元の企業がアピールする機会がたくさんあります。海外や道外からたくさん訪れてくれるのは嬉しいことですが、地元小樽のみなさんにもっと参加してほしいですね。地元を盛り上げるために、近年では小学生が潮ねりこみに参加する企画を積極的に進めています。潮まつり50回目の時にはサンモール商店街では音楽や太鼓で盛り上げたことで、地元のみなさんから大きな反響がありました。今後も続けるか検討しています。

潮太鼓について

—潮太鼓の特徴について教えてください。
木村さん…もともと潮まつりを盛り上げるため太鼓が不可欠だということで創設されました。近年では老人ホームで奉仕したり、クルーズ船のお客さんたちの歓迎などでも打演を行っていますし、札幌で活動することもありますよ。いまでは、東京の人でも潮太鼓を聞いたことあるという人がいますし、根強いファンもたくさんいます。

—おたる潮太鼓保存会は何名くらいで活動しているのですか。

木村さん…小学生から中学生まで約100人程度、大人は50人くらいで、合計約150人が小樽の各

る。これからも小樽の伝統を木村さんの明るさで守り続けて行ってほしい。



小樽稲荷神社



太鼓



インタビューの様子

チーム07
扇谷菜那・大城彰仁・大水誠也・岡山真由

激動の時代を生き抜いた 祝津の漁師

せとう たけとし
佐藤 武利 さん

元漁師、小樽祝津たなげ会



プロフィール

昭和6(1931)年、小樽市祝津生まれ。高等小学校生時代から漁師の手伝いを始め、漁師となる。ニシンが不漁となり、ホタテ漁への大きな転換の時代を経験した。平成21(2009)年、漁師を引退。現在は同20年に発足したNPO法人「小樽祝津たなげ会」の一員として祝津の活性化に取り組んでいる。

祝津のまちの現在

「今と昔の祝津を比べて、変わった点と変わっていない点を教えてください。」

佐藤さん「今と昔で変わったことといったら、祝津の人口がすごく減ってしまったことかな。人口だけじゃなく、漁師も減ってしまったのが現状だね。漁師についていえば、昔は子どもたちも小さい頃から働いていたよ。遊んでなんかいないで、とにかく生活費を稼ぐためにずっと働いていたんだよ。いまでは考えられないと思うけど、ニシンの引き揚げの日には学校が休みになったんだよ。他に変わったことといえば、ニシンが獲れなくなると、ホタテの養殖に乗り換えていったことが大きな変化だね。今と昔で変わらなかった点といえば、やはり、いまでも漁業がこの祝津のまちの中心にあるっていうことかな。みんな自分たちの仕事に誇りを持っていて、ニシンが取れなくなった時期も漁師をやめた人はいなかったからね。」

「祝津でも人口減少が激しいとのことですが、現在までこのような人口減少問題と地域の衰退に対して、たなげ会はどのように向かい合ってきたのでしょうか。」
佐藤さん「祝津は昔と比べて誰の目にも衰退したとかんじられるようになってきたから、まちおこしをしようというところでたなげ会を立ち上げたんだよ。たなげ会のイベントでは、祝津で取れた海鮮を

私たちのチームは、祝津で長年漁師として働き、現在は小樽祝津たなげ会で祝津の活性化に取り組んでいる小樽祝津たなげ会の佐藤さんに取材させていただいた。取材では漁師になったきっかけや仕事の内容から、現在の小樽についてまで、いろいろな質問をさせていただき、詳しく教えてくださいました。

祝津の漁師とは

「祝津で漁師になったきっかけを教えてください。どうして祝津なのですか。」

佐藤さん「生まれた時から漁師の家庭で、祝津のまちは漁業のまちなので漁師になるのが当たり前という雰囲気だったね。だから、自然と漁師の道に進んだんですよ。大人になってからも、祝津の人と結婚して、ずっと祝津の漁師でした。漁師を引退してから、こうして、祝津のたなげ会で活動しているんですよ。」

「祝津の漁師ならではのエピソードはありますか。」
佐藤さん「祝津は昔からニシン漁ばかりが目玉されてきましたが、実はホタテ漁の発祥地でもあるんだよ。昔は祝津から北の方を回ってオホーツク海の方へ行っていました。親方としてその土地の人にホタテ漁を教えていたんだ。私は行ってない

安く売ったり、無料で提供したりもするんだ。イベントなどで祝津までやって来てくれた人たちが「こんな美味しいものは食べたことがない」と言ってくれて、また来てくれたりもしたんだよ。おかげで一時期よりも祝津が賑わってきたようにかんじているよ。祝津は魚で繁栄していたまちだから、また魚を使ってまちおこしをしているんだ。」

「佐藤さんがこれからのたなげ会に期待することとは何ですか。」

佐藤さん「今は昔と違って後継者不足が深刻なんだよ。私たちだけでなく、若い人たちにも積極的にたなげ会に関わってもらって意見をたくさん取り入れていきたいと考えているよ。君たちみたいな若い力を活かして、このたなげ会で祝津の活性化に貢献できる事業ができたらいいなと思っています。」

まとめ

「私たちは、二度にわたる佐藤さんへの取材を通して、佐藤さんの祝津に対する強い熱意や愛着を感じました。取材中は、まるで一つ質問すれば回答が3つ4つ帰ってきているように感じるくらい、まったく途切れることなく祝津について熱く語っていたんだ。そのときの佐藤さんの眼差しがとても印象的だった。現在は漁師の仕事を引退して

けど、周りの人はかなり行っていったよ。そこで嫁さんをもらって帰ってくる人もいたし、婿入りして祝津に帰ってこなかった人もいるよ。だから、今でも祝津には、斜里や網走、紋別、常呂に親戚がいる人がかなりいるんだ。」

「昭和30年代以降はニシンが不漁になったと聞きました。佐藤さんや仲間の漁師の方たちは出稼ぎに出たりしていましたか。」

佐藤さん「ニシンが不漁になったんで、かわりにスケソウダラを獲ったり、オホーツク海に出稼ぎに行ったりする漁師の人もいたね。だけど、私はホタテの養殖を始めることにしたんだよ。祝津ではニシンが獲れなくなったからといって漁師をやめた人はいなかったね。」

小樽祝津たなげ会とは

「たなげ会の立ち上げの経緯を教えてください。」
佐藤さん「誰か一人が立ち上げようとしたのではなく、祝津のまちおこしをしようとしたのでみんなでも立ち上げたんだよ。やっぱり祝津も昔の賑やかだった頃に比べると寂しくなってきたから、みんなでもまちおこしをしようという気持ちが強かったんだ。」

「一線引いているが、漁業のまちとしての祝津の時代を築いてきた佐藤さんは、まちを再び活気づかせるのは、今も昔も変わらず漁業の力であると信じているとのことだった。」



インタビューの様子。土井善弘さんにご協力いただいた。



祝津漁港

チーム 08
小澤 真凜・音喜多 真美・折笠 楓太・加藤 瑠真

運河の変遷をみてきた 市役所職員

ささやま ときひろ
笹山時彦さん
元小樽市役所職員



プロフィール

昭和22(1947)年、北海道積丹町出身。大工の家に生まれ、中学校を卒業した頃から親について大工になることに。同42年、札幌群北広島村(現・北広島市)産業短期大学(道都大学短期大学部、現在は廃止)へ進学。同44年、小樽市役所に就職し、都市計画課に配属。その後、同56年から用地対策室、平成6(1994)年から下水道課、同15年から市役所へ戻り、宅地係で勤務。同19年、定年退職。

小樽市役所の用地対策室とは

― 用地対策室にいた頃の話をお聞かせください。
笹山さん… 昭和57年に土木部用地対策室という部署に移動になりました。この部署は簡単にいうと、道路のために土地を売ってもらうことをお願いしに行く部署なんです。小樽はどこの道が狭いでしょう。もつと昔、私が用地対策室にいる時はさらに道幅は狭かったんです。だから、もつと道幅を広げようという話になりました。大体10mから18mくらいですね。道路を広げるにはその分の土地が必要になります。その土地を道路周辺の人たちに売ってくださいとお願ひして回っていました。昭和57年から平成6(1994)年までですから12年間担当していましたね。
 ― 用地対策室にいて大変だったことは何ですか。
笹山さん… たくさんありますが、やはり土地をなかなか売ってくれないことですね。道路の周りで商売ですとか、ずっと昔からその土地に住んでる人はなかなか首を縦には振りませんでしたね。それこそ、自分たちの次の引越し先を明確にしてくれないと、絶対に承諾してはくれませんでした。

水道局の仕事

― 用地対策室からどこへ異動なされたんですか。
笹山さん… 次は水道局に配属になりました。もう平成になった頃でしたね。水道局に行くときは、辞令は市長ではなく水道局長からもらうんですよ。

私たちのチームは、小樽市役所職員として小樽のまちづくりを支えてきた笹山時彦さんにインタビューを行った。笹山さんは、運河論争の頃、小樽市役所で勤務し始め、後に道路拡幅のための用地買収を行う部署に配属されており、小樽のまちづくりの現場に長く関わっていらした方で、当時の様子など興味深いお話を伺うことができた。

生い立ち

― 笹山さんはどちらでお生まれになったのですか。
笹山さん… 私は北海道の積丹町で生まれました。今はもうそんなに獲れないと思うけど、私たちの小さい頃には積丹の海では昆布がたくさん獲れていましたね。そこから北広島に行ったのですが、その当時はまだ札幌郡北広島村という名前でした。そこで産業短期大学、少し前まであった道都大学の短期大学部にあたるところですね。その学校へ通い、卒業してから小樽へ来たんです。それからもうずっと小樽です。
 ― 以前、大工をされていたそうですが市役所に勤めることになったきっかけは何でしょうか。
笹山さん… 叔父が船大工で、和船をつくられていたんですが、私の父は普通の大工をしていました。もともと中学校の時から卒業したら働くものだと思っていましたし、1つ上の兄も大工をしていたこと

それで、市長からは水道局への出向命令というのが来るんです。水道局は公営の企業だから、水道局長に辞令を出してもらわないといけないんですよ。その点が他の部署とは違うところですね。
 ― 水道局ではどのような部署に配属されたのでしょうか。
笹山さん… 下水道管理係という部署に配属されました。とはいっても下水道の管理をするわけではなくて、汲み取りから下水道に切り替えたいという一般家庭からの申請を受けて小樽市の指定工事に取り次ぐという仕事をしていました。工事が終わったらそこへ検査に行きます。小樽市では汲み取りから水洗トイレにするときに50万円の貸付をしていて、運河に直接下水を流さないために、流しとお風呂だけ下水道につなぐという方には10万円を貸していたんです。当時は、下水道をつないでもらうために、住民の皆さんにお願いして歩いていましたね。

― 今こうして運河がきれいになっているのは、笹山さんのような方が頑張ってくださいとおかげなんです。

まとめ

― 運河論争は、歴史として学ぶと市民運動の激しさばかりが印象的だが、論争が集結した後には小樽運河周辺の景観を大事にするようになっていった

もあって普通に大工になりました。大学に入るまでは兄と同じ道を進んでいたのですが、やはり1歳差の兄弟だと同じことをやると負けたくないと思ってしまっただけです。兄は建築の方面へ進んでいましたので、私も試験は建築で受けましたが、その後土木に変えたんです。そして学校から市役所に行かないかといわれて試験を受けることにしたというのが市役所に勤めるようになったきっかけです。土木は建物以外のものほとんどを担当しています。私は都市計画課に配属されることになりました。しばらく後に運河論争が始まりました。

小樽運河について

― 小樽運河について詳しく教えてください。
笹山さん… 小樽の観光スポットとして有名な小樽運河は、実は海面を埋め立てることでできたもので、一般的な運河とはかなり違ってきます。海面を埋め立ててつくった埋立地が第三埠頭などになります。ちなみに第三埠頭はどのように利用されているか知っていますか。毎年7月に開催される小樽潮まつりの会場は第三埠頭です。いま残っている運河は当時の運河よりも小さいんですよ。というのは、昭和61(1986)年に道道臨港線の運河に係る部分が竣工しました。しかし、現在では「北運河」と呼ばれている運河の北部は埋め立てられずに残っていて、当時と同じく40m幅のままです。作業船とか小型船などがいまでも停留しています。

ことは知っていた。しかし今回のインタビューを通して、運河を大事にするための具体的な方策や、現在、運河の周辺が観光地としてにぎわっているという大きな成果の背景には地道で目立たない皆さんの努力があることを学んだ。



インタビューの様子



小樽市役所勤務時代の辞令

チーム09
 萱場菜月・工藤勇樹・熊川佳音・越田葉菜

故郷小樽に捧げた生き方

し さ ま さ み ち
志佐公道 さん
プロカメラマン



プロフィール

昭和29(1954)年、小樽市桜町生まれ。桜小学校、桜町中学校、潮陵高等学校定時制を卒業後、東京写真短期大学現・東京工芸大学へ進学。同53年、運河保存運動に興味を惹かれ東京から小樽へ帰郷。同54年、Office PAPER MOONを妻と一緒に立ち上げる。プロカメラマンとしての活動の他、一市民としてポートフェスティバル・イン・オタルやオタル・サマーフェスティバルなど、様々な小樽のまちづくり活動にも関わる。

私たちのチームは、小樽のプロカメラマンで、PAPER MOON(事務所兼スタジオ)のオーナーである志佐公道さんにお話を伺った。志佐さんは小樽が大好きな方で、小樽のまちとまちづくりについて興味深いお話を聞くことができた。

プロカメラマンとしての活動

写真撮る上での絶対に譲れないポリシーはありますか。
志佐さん…私は営業館(写真屋さん、スタジオ)がやらない仕事をしています。つまり、結婚式、葬式、子供が生まれた誕生の祝いの写真といったものではなく、広告写真、雑誌の取材、風景写真などを中心に写真を撮っています。何かに活用できる写真を撮りたいというのが私の考え方です。

運河保存運動の始まり

PAPER MOONを設立しカメラマンとして活動していくなかで、人生で大きな転機はありましたか？
志佐さん…昭和50(1975)年に小樽に帰ってきて、開店してまもない喫茶店「叫見楼」に行ったことです。そこで色々な話を聞いて小樽がだんだん変わってきていることを知りました。そして同56年に帰ってきた時にはますます状況が変わっていて、その頃から運河を潰そうという話ばかりが出ていたのですが、「叫見楼」にいた人たちは保存派でした。

小樽運河埋め立ての危機を感じたから小樽にくうちは行動していきたいですね。まだまだじっくり生きてやろうと思います。

小樽の魅力

志佐さんが考える小樽の一番の魅力は何ですか。
志佐さん…自然ですね。まちなかから少し行けば海も山もあります。こんなところは滅多にありません。世界一のまちだと思っています。

これからの小樽に期待することは何ですか。
志佐さん…とにかくもつと小樽がいいまちになってほしいですね。観光に力を入れるのも良いですが、市民も住み良いまちづくりが一番大事です。みんながゆったり過ごしているのを観光客が見にきたらいいんですよ。私もこのまちに住みたいと思わせるような、良いまちにするんです。住んでいる人たちが積極的に提案するようにすれば、必然的に人が集まってきて、もつと良いまちになるはずですよ。小樽全体が観光資源になればいいと思っています。

まとめ

今回のインタビューを通じて、志佐さんは私達に熱く小樽への思いを語ってくれた。「自分たちが愛する小樽というまちのために何ができるか」という姿勢で小樽のまちづくりに貢献することは商大生にとっても必要なことだと感じた。今後、私たちも小樽の活性化に積極的にかかわっていききたいと思う。

これからの生き方

様々な時代の流れの変化がありますが、これからの生き方についてどのように考えていますか。
志佐さん…まだそこまで考えていませんが、自分のやりたいことを続けていきたいです。魅力がたぐさんあるこのまちのためになることを、体が動

サマーフェスティバルと運河保存運動

サマーフェスティバルと運河保存運動の関係について教えてください。
志佐さん…運河保存運動のことは最初のポートフェスティバルでは前面に出しませんでした。サマーフェスティバルは初めて小樽運河を守る会の人も、ポートフェスティバルの人も、商工会議所の人も、小樽市民みんなが関わったイベントです。運河保存に反対の人も賛成の人も枠を超えてみんなでやろうよということになったんです。

戻ってきたのですか。

志佐さん…最初の予定では東京に20年住んでみようと思っていました。小樽に帰郷した時、「叫見楼」で佐々木一夫さんに捕まっちゃったので結局3年で帰ってきたんですね。20年後に帰ってくるまちでいまこんな大事件が起こっているの、ただ外から見ているのはおかしいとかんじたので、少し小樽に帰ってまた東京出ようと考えていました。結局、ポートフェスティバル・イン・オタルやいろんなことに関わることになり、どっぷり漬かっているうちに、小樽に帰ってきてから40年経ちました。

「叫見楼」で知り合った仲間たち

「叫見楼」は小樽のまちづくり活動を一緒に行った佐々木一夫さんやバンドの人たちと出会った場ということですね。

志佐さん…そうですね。この人たちはみんな小樽運河を守る会には入っていませんでしたが、保存活動はして、運河保存についての小樽市民10万人の署名を集めた時も彼らが中心となっていました。

オタル・サマーフェスティバル開催の経緯

サマーフェスティバルの開催の経緯について教えてください。
志佐さん…若者だけで話す場を新たに作ろうというので運河保存派の20代の若者が中心となって立ち上げたイベントがポートフェスティバルです。



インタビューの様子



ポートフェスティバル・イン・オタル



オタル・サマーフェスティバル



喫茶店「叫見楼」

チーム 10
崎野眞子・櫻井すず・清水萌絵子・重堂真綺

鯉場の記憶を伝える

そうま よしはる
相馬義春さん

忍路鯉場の会長



プロフィール

昭和28(1953)年、小樽市蘭島生まれ。小樽工業高校を卒業後、電電公社(現NTT)に就職。40歳の時、知人から忍路鯉場の会を紹介されたことがきっかけとなり、入会。61歳の時、同会長となり、前会長から引き継いだ資料の保存や、忍路神社例大祭での活動など、忍路鯉場の会の様々な活動を行っている。

私たちのチームは、小樽市内中心部から車で20分程の忍路で活動する忍路鯉場の会の会長、相馬義春さんに取材を行った。ニシン漁を支えた漁撈歌や、かつてのニシン漁の様子、これからの小樽についてなど、興味深いお話を聞くことができた。

忍路鯉場の会について

— 鯉場の会発足の経緯について教えてください。
相場さん…北海道では江戸時代から昭和初期までニシン漁が盛んでした。積丹半島周辺、特に忍路場所が大漁場だったんですよ。昭和49(1974)年、忍路場所があった忍路地区で忍路鯉場の会が発足し、55年に会が保存、伝承しているニシン漁撈の作業唄、行事が小樽市指定の無形民俗文化財に指定されています。

— 忍路鯉場の会はどのような活動をされていますか。
相場さん…主な活動としては、かつての伝統的な鯉漁撈に関する歌、行事などの保存を行っています。最盛期は会員数が33人いましたが、現在は半数近くに減少してしまいました。忍路・蘭島の会員が大多数を占めていますが、札幌の会員も少数ながらいます。後世に引き継ぐため、新規会員の取得に向けた活動を行っています。若く、若い世代の参加を促すことが厳しく、代わりに昔のニシン漁を知る高齢者が新たに入会することが多いですね。

— 忍路のニシン漁について教えてください。
相場さん…忍路はかつてニシン漁で栄えたまちです。東北方からの出稼ぎ漁師がたくさんいましたね。現在では初期投資の費用負担が大きかったことや漁獲量が減少していることが原因で、かつてのような大規模なニシン漁は行われていませんし、後継者不足で漁師数も減少しています。

— 考えて音頭を取ることが一般的ですが、自分たちも少しでも協力したいと思っていくつかアイデアを提案することもありますが、なかなか聞き入れてもらえません。ヒントを出したら食いついてくれる環境があれば良いのですが、そうでないので自分たちも消極的になってしまいます。また、資金も今後の課題になるでしょうね。ネットではクラウドファンディングを使って資金を集める方法もあり、魅力的ですが高齢者には厳しい方法ですね。人口減少に歯止めがかからない小樽ですが、特に若者が地域から消滅しようとしています。この対策は非常に難しいと思いますが、残っている元気な高齢者の活動の場を考えてもらいたいです。

— 若い世代に期待することは何ですか。
相場さん…町内会の運営も本当は若者に参加してもらいたいところですが、仕事や子育てで忙しくてなかなか引き受けてもらえません。地域活動に若者が参加してくれないのが現状で、もつと積極的に参加してもらいたいです。地域に住む人は子どもからお年寄りまで様々です。子どもができること、若者ができること、子育て世代ができること、世代間の交流の場を作り、それぞれの思いを理解することで、地域はより活性化すると思います。いま、数少ない若者が声を上げること、そんな場を作っていくことが先輩である私たちの役目ではないでしょうか。また、大学生には今回のようなインタビュー等を通じていろいろなところに取材に行って、自分ができそうなことや興味のあることにはぜひ挑戦してほしいですね。特に商大生には小樽でしかできないことを見つけてほしいです。

— 漁撈歌とはどのようなものですか。

相場さん…今ではニシンの養殖、放流の成果で資源は回復していますが、かつてのニシンの種類、漁獲量とは違います。漁では船の自動化、機械化が進み、かつてのように人手で作業することが少なくなりましたので、漁撈歌が歌われることはありません。漁撈歌としては、手漕ぎ船で進む際に歌われる「船漕ぎの歌」、網から鯉を船にのせるときに歌われる「沖揚げの歌」、網について鯉の卵を落とす時に歌われる「子はたき音頭」があります。歌詞の意味は不明確で、言語化するのが難しい複数のパターンがあります。歌に合わせてかけ声をかけるのが重要なのですが、人によって歌い方や流れが異なり、かけ合いするのが難しいです。現在は80代の方が歌い手を担当しています。歌い手はとても重要な役割なので、歌い手の高齢化は会の存続に関わる問題です。

— 鯉場の会の保存以外の活動について教えてください。
相場さん…鯉場の会は当時の伝統を保存するだけでなく、忍路神社例大祭に参加しています。私たちは何人かのボランティアの手を借りて、神輿を担いで忍路神社を出発し、漁港では会所有の船に神輿を移し、船漕ぎの唄に合わせて忍路漁港内で海上渡御を行います。神輿を神社に運ぶ時には、鳥居をくぐろうとする人とそれを阻止する人で盛り上がり、かつてはかがり火を倒したり、階段に頭をぶつけて脳震盪を起こす人もいました。

相馬さんと忍路鯉場の会での経験

— 相馬さんが鯉場の会に入った経緯を教えてください。
相場さん…私の家はニシン漁とは関わりがなかったのですが、父親から昔のニシン漁の話は聞いていま

まとめ

— 今回、相馬さんにインタビューしたことで、ニシン漁を支えた漁撈歌とそれを保存し、伝える忍路鯉場の会の活動について知ることができた。また、これからの小樽について考える機会を得ることができた。忍路鯉場の会の活動はとても意義深く、地域の若者が積極的に参加するようになることを期待したい。



インタビューの様子



忍路鯉場の会 42 回網おろし (2016年3月12日)



忍路神社祭礼 (1976年7月5日)

小樽の将来について

— これからの小樽について、どのようにお考えですか。
相場さん…いまの小樽はあまり新しいことをしようとしていないですね。北海道ではまちおこしは役所が

チーム 11

白幡綾香・新藤啓生・菅原友季・関根颯

切り絵を通して知る小樽

たかはし えつろう

高橋悦郎 さん

元教員、切り絵作家



プロフィール

昭和15(1940)年、熊石村生まれ。3歳から小樽で育つ。学芸大学札幌分校現北海道教育大学卒業。同45年、浜中学校勤務中、中学校美術教師に切り絵の指導を受け、今日に至るまで独学で切り絵を続けている。その間、小樽で「日中友好協会」の切り絵に接し、「小樽きりがみ研究会」の代表として各種講習会の指導にも携わる。同54年まで、「日中友好切り絵コンクール」に自作品を出品。平成19(2007)年に「切り絵カルタ」を作成、翌年発売。以降も美術展出展など、切り絵に深く関わる。現在はライフワークの一つとして、「小樽の建物を製作中」。

にしようと考えて絵柄を選定しました。幸枝さんから送られて来た文章に沿って絵柄を作ったり、逆にここは絶対外せないと私の絵柄から文章を考えてもらったこともありましたね。空襲の絵札もその一つです。

小樽の活性化について

「切り絵カルタが小樽の活性化につながったことですが、以前から小樽の活性化に関心があったのでしようか。」

高橋さん…父が教師で、仕事の関係もあって高校の時から小樽に住んでいたのですが、小樽についてはよく知っていました。以前から小樽の活性化に興味があったわけではありません。浜中町の中学の美術の先生に切り絵を教えてもらう中で、小樽の良いところを子どもたちに再発見してもらいたいと思って、切り絵カルタの活動を始めたことから小樽の活性化に関心を持つようになりました。

「切り絵の他に、取り組んでいることはありますか。高橋さん…切り絵カルタの他に小樽の町名調査もやっています。始めたきっかけは小学校の家庭訪問です。子どもたちの家を回るのに住所を言われてもわからないし、どこを通れば近道か、地図を書かないといけないって(笑)。それで小樽の地図を書いているうちに子どもたちに小樽がどのように変化してきたのか伝えていく必要があると思うようになりまして。例えば、「今みんなが歩いているところは昔海だったんだよ」とかね。他にも、最近では小樽に関する新聞記事や、小説の一部などを見つけたら、その部分を抜き出して切り文字を作って飾ったりしています。」

私たちのチームは、小樽の切り絵作家の高橋悦郎さんにインタビューさせていただいた。都通り商店街に展示されている小樽切り絵カルタの作者で知られる高橋さんは、とても優しい雰囲気の方で、こちらが質問した事に丁寧に答えてくださった。

切り絵を始めたきっかけ

「なぜ切り絵を始めたのですか。高橋さん…切り絵を始めたのは、昭和47(1972)年頃だから、もう40年くらい経ちますね。教員だった時に、勤務先の学校長が絵画好きだったので絵に接する機会は多かったのですが、すごく好きというわけではありませんでした。しかし、切り絵は版画より簡単で続けやすそうだったので、始めてみたら楽しかったんですよ。文具店で材料を揃えて造り始めました。これまで788作品作りましたよ。」

生い立ち

「どちらでお生まれになったのでしょうか。高橋さん…両親は江差の人で、生まれたのは今では八雲町になりましたが、熊石村でした。3歳の時に小樽に引っ越してきました。教員になるために就職先を探していたところ、釧路方の白糠町の教員になりました。2つ目の勤め先の浜中町の学校で切り絵に出会いました。それからずっと切り絵を続けて、いまに至ります。」

印象的な作品

「お気に入りの作品はなんですか。」

商大生に伝えたいこと

「これから社会に出ていく商大生など若者に伝えたいことは何でしょうか。高橋さん…10年ぐらい前から商大生は小樽を知ってもらおうと頑張っているとかんじています。商大生は小樽から就職で外に出ていくことが多いですが、小樽出身の学生でなくとも、商大に通ったことで愛着を持ってくれる人が多いですから、将来的に何らかのかたちで小樽に貢献してくれるといいですね。」

小樽のまちとは

「高橋さんにとって小樽はどんなまちでしょうか。高橋さん…以前、商大生は卒業後、近郊で会社に勤める人も多かったのですが、最近では仕事がなくなくなっていきます。銀行が札幌に移転しどんどんなくなっていますね。小樽は元々中小企業のまちですから、なるべくそういう企業に貢献してもらえると良いのですが、残念ながら工場は銭函方面くらいです。これからは小樽の歴史的なものを残し、再利用で生かしながら、若い人が生き生きと働けるまちになればいいですね。かつて繁栄した小樽に学び、今後は小樽運河をはじめとする観光都市としてさらに発展してほしいです。」

まとめ

「今回のインタビューを通して、改めて小樽のまちを見直すことができた。高橋さんが語る小樽からは、古き良きまちの本質がかんじられた。高橋さ

高橋さん…全ての作品を覚えてはいるわけではありませんが、切り絵カルタのなかで印象に残っているのは、小樽空襲の場面を描いた絵札でしょうか。B・29が飛んで来ている切り絵ですね。戦争という負のイメージが強すぎてみんな話題に出したくないんですよ。しかし、戦争という悲惨なことを繰り返さないためにも、子どもたちに昔はこんなことがあったんだよ、もうこんなことは起こしちゃ駄目なんだよという思いを込めて作った作品です。これが一番印象に残っていますね。」

小樽切り絵カルタについて

「小樽切り絵カルタを作ることになったきっかけを教えてください。」

高橋さん…小樽に着任してから初めての教え子だった高田幸枝さんが突然家に訪ねてきたんです。私にお願いしたいことがあるというので聞いてみると、町内会の子どもの会のためにカルタを作ってほしいとのことでした。カルタを通して子どもも大人も小樽の歴史を再発見してほしいとのことでした。最初はどうかと思いましたが、結局引き受けたことがきっかけですね。元々、市販する予定はなかったのですが、新聞記者さんが関心を持ってくださり、ぜひ市販してほしいとのこと、最終的に「小樽切り絵カルタ」として販売することにになりました。

「絵札の選定はどのように行なったのでしょうか。高橋さん…元々の目的がカルタを通じて小樽に関心を持ってもらったり、小樽の魅力を再認識してもらおうということだったので、小樽の名所はもちろん、市民の生活の様子や、昔の逸話などを作品

んのお話から、観光や調査では知ることが難しい小樽の姿を垣間見ることができた。



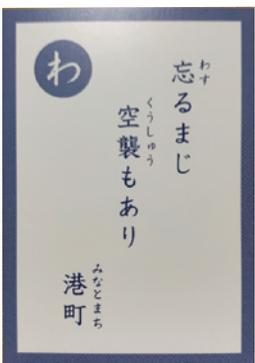
小樽切り絵カルタ (2008年)



インタビューの様子



「小樽空襲」の切り絵カルタ



チーム12
高木ひなの・高野大河・竹内洗稀・竹下沙耶

舞台裏のマエストロ 小さな町に世界的奏者が集う

たかの
高野るみさん

ゆらぎの黒ヴィオラマスタークラス実行委員会代表



プロフィール

昭和36(1961)年、留萌市生まれ。同54年、北海道留萌高等学校卒業。結婚を機に小樽市に移住。平成4(1992)年の第三回札幌PMFでヴィオラの演奏を聴き、感銘を受ける。その後、小樽市民センターでリサイタルを企画し、世界的ヴィオラ奏者の今井信子氏に演奏会を出演依頼。その後、今井氏からのヴィオラマスタークラス(VMC)開催のオファーを引き受け、同16年7月、朝里で「第一回ゆらぎの里VMC」を開催。第一回から第15回までVMCの会場の手配や学生や講師との連絡、スケジュール作成等を担当。

私たちのチームは、ヴィオラマスタークラス(以下、VMC)実行委員会代表である高野るみさんにお話を伺った。ヴィオラとの出会いから世界的奏者・今井信子さんを招いたVMC開催から現在に至るまでの貴重なお話を聞くことができた。

ヴィオラマスタークラスとは

—VMCについて教えてください。
高野さん…VMCとは、平成16(2004)年から31年まで冬に小樽の朝里で開催された音楽の合宿と演奏会です。世界的ヴィオラ奏者の今井信子さんをはじめとする講師陣の指導のもと、世界中から生徒さんが集まり、10日ほど朝里のホテルやペンションで一緒に生活しながらレッスン受講と合奏練習をして、最後に小樽のマリンホールで演奏会を行うのがVMCの大まかな流れです。

ヴィオラの魅力

—なぜヴィオラを好きになったのですか。
高野さん…私が30歳くらいの時、札幌PMF(パシフィック・ミュージック・フェスティバル)の楽器公開講座に友達と参加して、そこでヴィオラを聴いてその存在を知りました。ヴァイオリンやピアノならその時聴いた曲をもう一度聴きたいと思えばいくらでも機会がありますが、ヴィオラは限られているんですね。それでも、わざわざ出向いてでも聴きたいと思うくらいヴィオラに魅せられていました。ヴィオラを弾きたいとは少しも思ったことはないんですけどね。

今井信子さんの演奏会開催の経緯

—演奏会を開催するまでの経緯を教えてください。
高野さん…ヴィオラとの出会いからまもなくして小樽にマリンホールができるという話を聞いて、「ここでヴィオラの演奏会をやったら聴けるのかな」と思いました。有名どころは今井信子さんしか知らなかったのですが、今井先生のマネージャーに電話をかけて、小樽での演奏を依頼しました。当時は大変さを知らなかったから、すぐ行動に移せたのですよね。今井先生は依頼を快諾してくれて、平成8年に演奏会が実現しました。今井信子さんが小樽で演奏会をするということで北海道各地から聴衆が集まりマリンホールが満席になりました。満席はこの一回だけです。演奏会を何度も観ている方々ばかりで、そんな中、素人の私がたまたましてしまったので殺気立って怖かったです。自分では聴きたくて開催した演奏会でしたが、それどころではなく恐ろしいことをやってしまったと感じました。それでも演奏会は素晴らしく、お客さんも満足して帰られました。今井先生も地方都市で、しかもヴィオラで満員になることはしばらくなかったようで、とても喜んでくれました。

VMCの拠点となった小樽

—小樽がVMCの拠点となったきっかけを教えてください。
高野さん…今井先生から、現代音楽のCDを作る予定があり、録音前にどこかで弾きたいと思っただけで小樽で弾けないでしょうかと連絡をいただいたことがきっかけです。今井さんは、東京だとホール代もすごく高いし、多くの人を動員して大きなコンサート

シック音楽等の文化が広まり、小樽、朝里が活気のあるまちになったら嬉しいですね。

まとめ

—今回のインタビューで、VMC開催の背景には高野さんの様々な努力があったことが分かった。高野さんの思い、演奏会を開催する行動力、それを本当に実現したお話は本当に興味深かった。VMCは平成31年1月で終了するが、高野さんの活動は「音楽のまち」小樽にとっても貢献したと言えるだろう。

小樽・朝里のまちづくりの会とVMC

—高野さんと「小樽・朝里のまちづくりの会」との関係について教えてください。
高野さん…VMCを朝里で開催するにあたり、地域の人の理解や協力が必要だと思っただけです。そこで「小樽・朝里のまちづくりの会」に協力を求めたところ、快諾してくれたので、私も交流を深めるため入会しました。会の方は見返りがなくてもボランティアに熱心な人が多く、一生懸命取り組んでいます。とても忙しいですが楽しいんです。

演奏会を運営する上で大変なのは

—VMC開催まで、大変だったことなどはありましたか。
高野さん…何が大変かすらわからないような状況でしたから失敗は山程あります。演奏会に関してなら、お客様をどう集めるかはいつも問題です。最初の頃は、コンサートのチケットを作った方がいいけど、どこで、どう売れば良いかわからない。チ

今後の活動

—VMCは平成31年で活動を終了するそうですが、VMCの今後や高野さんの今後についてお聞かせください。

高野さん…VMCは今井信子先生と相談して、15回という区切りの良い回数で終わりにしようと考えていました。今は最高のフィナーレになるように活動をしていますのでそれ以降は開催する可能性は低いと思います。ですが、今まで関わってきた生徒や講師の方の活躍を見守っていきたくと思います。私は、朝里のまちづくりの会の活動を継続的に続け、小樽や朝里の町に関わっていきたくと思っています。また、今井先生も毎年1月に小樽に来ると新しい1年が始まるのを感じると言っていますので、今井先生が小樽に来る時にホテルや練習場の予約などお手伝いをさせていただこうと思っています。また、小樽で新しく演奏会を開きたいと思う人がいたり、何かイベントを開催したいと思う人がいたら、今までの自分の経験を活かして、協力させていただきたいです。小樽にクラ



練習場所：ペンションシャドウクラッセ



インタビューの様子



練習場所：朝里クラッセホテル

チーム13
田中零治・谷村勇斗・中尾柚貴・長野瑞生

小樽を「寿司のまち」に

なかい
中井ユウさん
「日本橋」女将



プロフィール

昭和24(1949)年、福井県福井市で出生。生後すぐに小樽へ移住。双葉高校を経て、札幌大学に進学するも、父親の死により中退。中退後、松下電器(現・パナソニック)に就職し、シヨールームスタッフとして勤務。その後、寿司職人の蔚さんと出会い結婚。同51年、花園銀座商店街に寿司店「日本橋」を開店。同62年、店舗を稲穂に移転。同63年、小樽の寿司店4店と共に「小樽寿司屋通り」を設立。女将業をこなしながら、小樽を「寿司のまち」にするべく広報活動に携わる。現在は「日本橋」の女将兼経営者として、国内外の様々なお客様にお寿司を提供している。

私のチームは、小樽の寿司屋通りにある「日本橋」の女将、中井ユウさんにお話を伺った。小樽が今日のような「寿司のまち」として定着するまでに、小樽寿司屋通りの関係者をはじめとする多くの人々の尽力があった。寿司が小樽の観光資源として定着していった背景や、小樽寿司屋通り設立の経緯について、分かりやすく、時にユーモラスに語っていただいた。

生い立ち

— 中井さんの生い立ちについて教えてください。
中井さん…生まれは福井県の福井市です。生まれて数か月後に小樽へ移住しました。戦時中、父は満州で満州鉄道のエンジニアをしていたのですが、戦前は父もその兄弟もみんな小樽に住んでいて、もし元気で復員することができたら、もう一度小樽に集まろうと決めていたそうです。父が復員して鳥取で働いていた時、この下宿のおばさんが、当時、福井にいた母の親戚で、母と見合い結婚しました。そこで私が生まれて、両親はまだ乳飲み子の私を抱えて小樽へ移住しました。

小樽寿司屋通りの設立

— 小樽寿司屋通り設立の経緯を教えてください。
中井さん…昭和62年頃、小樽経済の衰退が著しく、市内だけに需要を求めるのは限界があると感じました。そこでどうやって小樽に人を呼び込もうか考えていた時に、小樽運河の保存論争が決着し、最終的に運河が半分残されました。かつては石油ラ

ンプや漁業用の浮き玉を作っていた北一硝子さんが、観光商品としてのガラス製品を作り成功しました。運河を見て、ガラスを買って、となると今度は「食」ですよ。昔からお寿司屋さんが多かったこともあり、観光の一環として小樽の美味しいお寿司を全国に広めていこうとしました。元々、いまの小樽の場所はスポーツ用品店で、その社長さんが土地を売る時に、私たちに声をかけてくれたんです。それがきっかけで、稲穂でお寿司屋さんと大和家さんがあって、さらに偶然、まちのさんも前の店舗が火事になってここへ移転してきたんです。それで、大きなお店ばかりが集中してきたので、少し離れています。しかし、まちさんも含めて寿司屋通り名店会を結成し、ここを小樽の寿司の起点にしよう、寿司屋通りを作ろうということになりました。

小樽を「寿司のまち」にするための広報活動

— 小樽を寿司のまちとして定着させるためにどのような活動を行ったのですか。
中井さん…まず5店で600万円くらいを出し合せて小樽寿司屋通りの鉄柱を作りました。それから、東京や大阪から来る飛行機の中にパンフレットを置いたり、春や秋に百貨店の物産展に出向いて、お寿司を握って小樽の寿司をアピールしたりと、そんな活動を30年近く、現在もやっています。以前、「11PM」という番組の「秘湯の旅」というコーナーのリポーターとして活動していました。

その時に、番組の制作会社に小樽を取り上げてももらえるよう交渉し、銀鱈荘の温泉を取り上げる過程で、五百羅漢などの小樽の観光地とお寿司も取り上げてもらいました。小樽観光をテレビで宣伝したのはこれが最初だと思います。その後、小樽を活気づけようと頑張っている女将がいるということを取り上げてもらえるようになったりして、そういう意味では、運が良かった部分も大きいです。

寿司屋通り設立のきっかけとなった「魚供養祭」

— 「魚供養祭」とはどのような行事なのですか。
中井さん…小樽寿司屋通り設立の1年前に政寿司さんが、魚を使って商売していく上で魚への感謝が足りていないのでは、という考えから始めたのが最初です。その後、名店会ができたので5店で行うようになりました。まず5店の親方から従業員まで全員が集まり、皆で協力してお客様に喜んでいただけるお寿司を提供しようと団結するイベントのようなものがあります。その数日後に、本当の供養祭があり、お寺の方々が来て、魚の腹の部分などに手を合わせて、お経を唱えます。その後、供養祭で使ったお米を海へ流して、魚への感謝を示します。

「日本橋」の女将として

— 接客する上で、何か心がけていることはありますか。
中井さん…常にお客様に美味しいものを食べると

いう感動を持ってもらうことです。今も昔も変わらず、お客様が「美味しかった」と微笑んだ顔を見るのが一番お店側としては嬉しいですね。

— 海外からの観光客向けに特別な対応などはしているのですか。

中井さん…特別なことというのはありません。ただ、当たり前なこと、つたない英語ではありますが、おもてなしの心をもって接客しています。少しの単語でも通じるので、挨拶などはその方々の国に合わせて使ってみたりします。そうすると、東南アジアの方でも、ヨーロッパの方でも最後に必ず日本語で「ありがとう」と言ってくれるんですよ。

小樽のこれから

— これからの小樽についての考えをお聞かせください。
中井さん…小樽は、住むにはすごく良い場所だと思のですが、いくら若い人に住んでももらいたくても、その前に企業がなければ生活できませんよね。小樽には土地があまりないので、工場のような企業ではなく、例えばIT企業のような、大きな土地がなくてもできる会社を小樽に作れないかと考えています。東京だったら家から会社へ行くのに1、2時間かかるのが当たり前で、疲れ切って電車に乗って帰るところを、小樽なら家から会社まで15分もあれば十分です。そしたらすごく時間の余裕ができて、家族や仲間と過ごす時間が増えますよね。小樽は風光明媚で情緒があって、海と山が両方楽しめるし、美味しい飲食店もたくさんあります。小樽は人間らしく生きられるまちだと思います。



インタビューの様子



「日本橋」店内



石原まき子さんの写真とサイン



小樽寿司屋通りの鉄塔

まとめ

— 中井さんは「日本橋」の経営とともに小樽の発展を考えて行動してきたのだということがよく理解できました。「これからの小樽をどうしていきたいのか、若いあなた方の意見を取り入れたい」という中井さんのお言葉を忘れず、小樽の大学生としてまちづくりに積極的に関わっていききたい。

チーム 14

中村杏奈・成田健斗・鳴海匠真・羽賀杏枝子

小樽に住む哲学者・詩人

はなさき こうへい
花崎 皋平 さん
哲学者・詩人



プロフィール

昭和6（1931）年、東京都生まれ。東京大学文学部哲学科卒業後、北海道大学に西洋哲学の教員として着任。マルクス主義の研究などに取り組む。同46年、大学紛争を契機に大学を自主退官。後に社会運動、アイヌ民族に関連した執筆活動や社会運動に取り組む。代表作は『静かな大地』 松浦武四郎とアイヌ民族（1998年、平成22（2010）年には長編詩『アイヌモシリの風に吹かれて』が第43回小熊秀雄賞受賞。

かさに貪欲にならず、和人の捨て子を見捨てず大切に育て上げるなど、心豊かな民族です。私はそんなアイヌのことがとても大好きです。

「さっぽろ自由学校「遊」」について

「さっぽろ自由学校「遊」とはどのような学校なのか教えてくださいませんか。
花崎さん…ベトナム戦争後、政府や国ではなく、アジアの民衆どうし繋がりたいという気持ちから開校することになりました。苦勞して世界を変えようとしたり、自由を求めているアジアの人々、特に韓国や台湾の人々との交流を第一に考えています。開講されている講座は、参加者が学びたい講座を自ら作っています。そのような参加者の能動的な姿勢がさっぽろ自由学校「遊」の多様化に繋がったように思います。

社会運動について

「花崎さんが行なっている社会運動について教えてくださいませんか。
花崎さん…朝鮮戦争が起こった1950年当時、私は大学生で国のために働く軍国少年でした。朝鮮戦争反対という考えが社会運動を始めたきっかけでした。今でも社会運動が続いているのは、第一には平和を守らなければいけないという考えが根底にあります。また、核兵器での核戦争反対ということも人々に訴えていきたいからです。中でも、伊達の原子力開発反対の運動で、アイヌの人々と出会い、それをきっかけに交流が増えました。自分に対する影響が大き

私たちのチームは、哲学者であり詩人である花崎皋平さんにインタビューを行った。様々な社会運動に参加し、幅広い視点を持つ花崎さんのお話は興味深いものだった。また、小樽のまちや私たちが若い世代についてのお考えも聞くことができた。

敗戦の影響

「戦争体験から受けた影響について教えてください。
花崎さん…第二次世界大戦中、私は中学生だったので、疎開せずに東京で母と2人で暮らしていました。その時、最も苦しかったのは、食べ物がないことですね。そして、その辛い気持ちと国が努力しているのだから私も頑張らなければいけないという葛藤が辛かったです。戦争中は国のために生きることが美しいという考えでした。しかし、敗戦後は何を信じていいかわからず虚無感に駆られました。敗戦のショックは大きかったですね。

大学時代

「東京大学といえば名門中の名門ですが、学生時代は何をしていらしたのですか。
花崎さん…1940年代から50年代は、今に比べて世の中が揺れ動いていて、若者がどうしたらいいかすごく悩んでいた時代でした。私は勉強に集中したかったこともあり、東大に入りました。でも、講義に出てみると、その先生の学び方の枠にとらわれたくない、自分のやりたいことを学びたいから東大に来たんだという思いが強くなり、授業

ピープルズプランについて

「1990年から活動されている「ピープルズプラン研究所」について教えてください。
花崎さん…この研究所はピープルズプラン21世紀国際民衆行事で世界先住民会議の運営事務局に参加したことがきっかけで設立しました。「アジアとの交流」が目的です。ヨーロッパとの関係も広めたかったのですが、お金がなくてアジアが中心になっただけなんですけどね。市民が問題を自分たちで解決しよう」とか「越境する人民を育てよう」など、グローバルな考えを広めていくことを目的に活動しています。

小樽のまちへの思い

「花崎さんは小樽が好きとのことですが、小樽は衰退が進んでいますよね。何か思うことや伝えたいことはありますか。
花崎さん…どんなお店も閉店してしまっているしね。不便になるのでこれ以上減らさないでほしいと思っています。図書館の蔵書とか書店についても、売れ筋の本はたくさんありますが、図書館は資料や本を保存する場所としてしっかりしてほしいと思っています。映画館もなくなりましたね。昔はたくさんあったんですが。残念だと感じますよね。それに最近では小樽のまちで学生さんを見ません。小樽のいいところは静かで住みやすいところだと思っていますが、もともと元気があってもいいですよ。特に小樽商大の学生さん

にはほとんど出なくなりましたね（笑）。古典研究会というサークルに所属したり、興味のあることを追求してみたりと、能動的にやりたいことだけを勉強していました。

北海道大学を自主退官

「昭和39（1964）年に花崎さんは北海道大学に西洋哲学の教員として着任しましたが、その後なぜ自主退官してしまったのですか。
花崎さん…昭和45年に北大全共闘関係者による北大本部封鎖事件の被告人の学生の特別弁護を行いました。私は「学生と話し合って解決するべきである」という信念を持っていましたが、大学側は学生の意見に耳を傾けることなく機動隊を使って学生を排除してしまいました。そのような大学側の態度に疑問を抱きつつ、自身の生き方を見直した結果、大学を自主退官して生き方を変えようと思った。

「静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族」について

「執筆のきっかけは何ですか。また、アイヌ民族の魅力は何ですか。
花崎さん…1970年に私は伊達火力発電所建設反対運動に参加しました。運動の一環でその地域の歴史を調べるうちに、松浦武四郎とアイヌ民族に関心を持ち、もっと知りたいと思うようになったことがきっかけです。アイヌ民族の魅力は、穏やかさが挙げられると思います。彼らは金銭的な豊

まとめ

「自分が関心を持ったことについてとことん考え、突き詰めていく思考力。問題と感じたことについては解決方法を考え、実行に移すことができる行動力。インタビューを通して、これらが今の花崎さんを形作っているのだと感じた。花崎さんの小樽の街や若者への思いを受け止め、私たちも強い信念をもって生活していこうと思った。



花崎さんのご自宅



インタビューの様子

チーム 15

花田 茉優・平館 菜々子・福井 愛良・三木 麻由佳

鉄道車両を活用した イタリア料理店を経営して

ひら よしえ
比良 嘉恵 さん

リストランテ・トレノオーナー



プロフィール
小樽市出身。藤女子短期大学(平成13年廃止卒業後、東京で10年間コンピュータ関係の仕事に就く。昭和59(1984)年、小樽の高島1丁目で、旧国鉄の車両を活用したリストランテ・トレノをオープン。平成5(1993)年に第1回北イタリア・トレノツアーを開催し、同7年、同9年にそれぞれ中部イタリア、イタリア・ウィーンツアーを開催。同20年に小樽総合博物館本館前に移転し、リニューアルオープン。

しようなね。以前はアルデンテ(かた茹で)が分かってもらえず、トレノの Pasta は胃に悪いと言われていました。30年経つと Pasta の概念がすっかり変わりました。私、努力しましたよ。

博物館のそばへ移転した経緯

— 小樽市総合博物館本館のそばへ移転することになった経緯を教えてください。
比良さん… 鉄道記念館だった頃、レストランが撤退して市に苦情が来ることが度々ありました。そのため市から打診があり、北海道鉄道発祥の地と汽車のレストランとの縁のようなものをかんじて、移転を決断しました。最近では以前と違って、博物館へ来るお子様連れのお客様が増えて、いつも可愛い子供たちに会えます。これが楽しいのよね。

小樽市民会議について

— 比良さんが関わっている小樽市民会議について教えてください。
比良さん… 小樽市民会議は運河埋め立て反対運動に関わった人たちの集まりの一つで、いわゆるまちづくり団体です。みんな歳を重ねて最近あまり活発な活動は出来ていませんが、スクールコンサートや、2000年から小樽のカレンダーを発行していますよ。

小樽の魅力と商大生への期待

— 比良さんが考える小樽の魅力と、今後の商大生への期待を教えてください。
比良さん… 小樽の魅力は誰とでもコミュニケー

私たちのチームは、小樽でリストランテ・トレノというイタリア料理店を経営する比良嘉恵さんにインタビューを実施した。国鉄路線で全国を走っていた「スハ43形客車」の車体を利用する、一風変わったイタリアンレストラン。私たちは、そのお店を営んでいる比良嘉恵さんにお話を伺った。

開店の経緯

— リストランテ・トレノを開店するまでの経緯をお聞かせください。
比良さん… 当初はイタリアンレストランを営むことなど全く考えていませんでした。東京で10年間、コンピュータ関係の仕事についていたのですが、両親共に倒れて介護のために小樽に戻ってきました。ですが、帰ってきたものの、小樽では仕事が見つかりませんでした。たまたま、イタリアでの修行帰りのコックとの出会いがあり、私のイタ飯好きと重なり、レストランをやってみることにしました。30年前、小樽では炒めて出す Pasta が主流でしたが、茹で上げ Pasta の店にこだわりました。

リストランテ・トレノの強みとは

— 他のイタリアンレストランとは異なる魅力を教えてください。
比良さん… 一番の魅力は魚介類が新鮮なこと。季節ごとの魚介が安価で容易に手に入り、素材に

シヨンが取れるということですね。人と人との繋がりが深く、みんな知り合いのようなかんじです。昔は大家族で、家族ぐるみで仲良くなっていました。商大生への期待としては、小樽のまちとのコラボです。実際、商大生と小樽のまちの人とのコラボが結構ありますね。それはこれからの小樽にとっても良いことだと思います。これからも続けていってほしいですね。一つ思うことは、商大生の方たちは卒業したあと札幌や東京に行ってしまうので、少しでも小樽で色々なことを経験して、何か小樽にプラスになることをしてくれと嬉しいです。今、小樽は人口が減ってきているので、商大生の取組みで人口や観光客が少しでも増えたらとても助かります。

まとめ

— 今回、比良さんのお話を聞いて、リストランテ・トレノの開業の経緯を知ることができた上に、これから比良さんが大切にしていきたいことを教えていただくことができました。小樽と商大生の繋がりに期待しているという比良さんの話を聞き、商大生として小樽のまちとの繋がりを大切にしていきたいと思った。

しては東京より田舎の港町に軍配が上がります。ソースはすべて手作りしています。ですから、30年前と味が変わらないし、他の店と味が違うのよ。

リストランテ・トレノのお客さん

— 来店するお客さんはどのような方なのでしょうか。
比良さん… お客様の年齢層は幅広いですね。平日はサラリーマンの方が多くいらっしゃいますし、ランチなどは主婦の方がよく来店してくださります。土日などはお子さん連れのご家族が多いです。誕生日や記念日などは夜に予約を入れてお祝いをするご家族もいらっしゃいますよ。

開店後から現在まで

— 今までリストランテ・トレノを営んできて苦勞などありますか。
比良さん… いろんなことがありましたが、よく覚えていませんね。次々と目の前のことに追われる日々です。自分の体力、気力と相談しながらもう少し続けて行けたらと思います。

なぜイタリア料理なのか

— なぜイタリア料理を作ろうと考えたのですか。
比良さん… 細くて長いものへのあこがれから Pasta が大好きだったのよ。それにオペラ狂でした！音楽、絵画からイタリアに興味津々だったからで



インタビューの様子



リストランテ・トレノ



店内の様子

チーム 16
溝尾剛・三谷知沙・村上知世・山口雄也

小樽最古の餅屋

ふじのとひでかつ
藤野戸秀勝さん
 よしだくみこ
吉田久美子さん

雷除志ん古店主・店員



プロフィール

藤野戸秀勝さん。雷除志ん古の4代目。札幌で勤務していたが40年ほど前、父が倒れたことをきっかけに小樽へ引越して店を継ぐことになった。
 吉田久美子さん。昭和51年、小樽生まれ。母が藤野戸秀勝さんと知り合いで、手伝いをしていたことがきっかけで27歳のころから同店で勤務するようになり、現在に至る。

お店を継いで

「お店を引き継いでよかったと思いますか。」
 藤野戸さん「良かったことばかりではありませんね。なぜなら、引き継いだ最初の頃はとても大変でした。誰かから仕事を教わるということがありませんでしたので、自分で見よう見真似で練習したり、長年経験を重ねていって徐々にお餅の作り方に慣れていかなければなりませんでした。はじめの頃は、あんこを焦がしてしまったり、お餅の機械で自分の手を打撲してしまったりしたこともありましたが、お店を継いでまもない頃は、いつも来てくれているお客さんに、お父さんの頃とお餅の味が違うといわれていたりもしました。」

お店継続の秘訣

「長年お店を続けることができた秘訣は何でしょうか。」
 藤野戸さん「家族で買いに来てくれたり、そのお子さんが大きくなった後にまた新しい家族で買いに来たりしてくれることがあります。また、お土産としてお餅を買ってくださることもあって、もらった人たちがそれを食べてお店の存在を知って、新しいお客さんが増えたりもしています。また、長年ずつと買い続けてくれている常連客もたくさんいます。おかげさまでここまで長年続けることができました。また、最近では地元の方よりも

私たちのチームは、小樽で一番歴史があり、いや北海道内にとどまらず、全国からも注文が殺到するというお餅屋「雷除け志ん古」(かみなりよけしんこ)の店主である藤野戸秀勝さんと店員である吉田久美子さんにインタビューを行った。小樽で長年お店を続けてきた秘訣や、昔の小樽とお餅の深い繋がりなど、貴重なお話を伺うことができた。

雷除志ん古のルーツ

「小樽で開業した経緯を教えてください。」
 藤野戸さん「創業してから約150年もの月日が経っていますので、初代の経営者がどうして小樽にお店を出そうと思ったのかはわからないですよ。しかし、小樽は古くからとても重要な役割を果たしている港湾都市で、漁師や港湾労働者の方もたくさんいました。港町での仕事というのは体力勝負の重労働が多かったので、簡単に持ち運びができた、すぐ食べる事ができて、かつ腹持ちが良く、適度に甘さがあるお餅がとても人気だったとのこと。実際、小樽のような港町とお餅の繋がりが深く、かつてお餅屋さんは小樽に何百軒もあったそうですよ。その中でも、この「雷除志ん古」は一番古くからあるお店です。うちの店に伝わる話では、初代はてんびん棒に桶をつるして、小樽港などでお餅を売り歩いていました。」

雷除志ん古のお餅の特徴とは

「雷除志ん古のお餅の特徴は何でしょうか。」
 吉田さん「ほどよい固さで腰のあるお餅と、塩気のあるあんこですね。塩気が甘さを引き立てくれるおかげで、甘ったるさや、くどさが全然なくて、すっきりした味わいなので食べやすいと言われています。」

小樽の魅力とは

「小樽の魅力はどのようなところでしょうか。」
 藤野戸さん「静かで平和なまちであるところ。また、地震などの災害がかなり少ないですし、小樽は坂が多いので、水が上がってくることもありませんから、津波の心配などもほとんどありません。本当に住み心地が良いまちですね。」

まとめ

「今回、藤野戸さんと吉田さんへのインタビューを通して、昔の小樽とお餅の繋がりが歴史、これまでも長くお客様に愛され続けながらお店を続けることができた秘訣や、いきさつを知ることができた。」

早朝営業の理由

「なぜ朝早くから営業しているのでしょうか。」
 吉田さん「朝早く、会社や学校に行く前に買いに来るお客さんがほとんどなので、通勤通学の時間を過ぎてしまうと、お店周辺の人通りがとても少なくなってしまう。なので、午前中が販売の勝負どころになります。早朝営業で、売り切れ次第お店が閉まってしまいますので、買いに行こうと思ったら売り切れているということも起こりかねません。確実にお餅を買うことができるように、電話であらかじめ予約を取っておくこともできますよ。」

お店を継いだ経緯とは

「どうしてお店を引き継ごうと思ったのでしょうか。」
 藤野戸さん「以前は札幌で会社員として勤務していたのですが、父親が倒れてしまったことをきっかけに、小樽へ引越してきてお店の跡を継ぐことを決めました。実は、当初、自分が引き継ぐことは考えていなかったのですが、お兄さんたちが跡継ぎになってくれなかったんですよ。それで仕方なく引き継いだということもありますが(笑)。とは言いつつも、今でも先代だった父が作っていた味を壊さないことにこだわって毎日しっかりとお餅を作っていますよ。」

「あらめて小樽というまちは伝統があり、多くの人に愛されていると思えるきっかけとなった。」



雷除志ん古の店頭



店内の様子

※藤野戸秀勝さんが入院中の為、肖像写真は吉田さんのみを掲載しています。

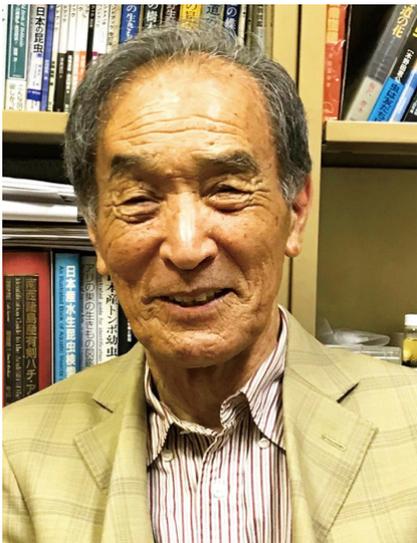
チーム17
 吉田美月・渡部涼・徐潤東・宋承達

小樽の文化とまちづくり

みずぐち ただし

水口 忠 さん

元教員 前小樽啄木会会長



プロフィール

昭和4(1929)年、小樽市生まれ。法政大学卒業後、小学校教員になる。同57年から3年間、パラグアイのアスンシオン日本人学校長を務める。その後、小樽に戻り、平成2(1990)年に小樽住吉中学校(2002年閉校)校長を最後に、教職から退く。同3年、余市町図書館長に就任。同11年、小樽啄木会会長に就任。博物館友の会会長などを歴任。現在も、市立小樽文学館協議会委員、博物館研究紀要編集委員、朝里まち育て「結」審査委員長を務めるなど、様々な場面で活躍している。

私たちのチームは教員として長年勤務していた前小樽啄木会会長の水口忠さんにインタビューを行った。水谷さんの小・中学校のころは戦時中で、特に旧制中学校時代は学業より人手不足の鉱山・工場や農家を手伝うなど様々な経験を積んだ。その後教員となり退職後は余市図書館長や小樽の博物館・文学館など障害学習にかかわることの協力している。今回は水口さんの退職後の活動を中心にお話を伺った。

「ぶん公」の絵本をつくるきっかけ

— 消防犬「ぶん公」の絵本をつくらうと思ったきっかけを教えてください。
水口さん…子どもの頃から童話がとても好きでした。教員になってからも、自分で童話を書いて生徒たちに読み聞かせをしたりしていました。退職後東京の出版社の肩を案内した時に、自著の子供向けの「おたる歴史ものがたり」をさしあげた。その中のコラムにあった「消防犬ぶん公」が面白いので、書き直し単行本での出版を勧められました。

絵本をつくる苦労

— 絵本をつくる際に苦労したことはありますか。
水口さん…編集者の方の指示が細かくて、それに応えるのが大変でした。しかし、おかげで、「ぶん公」

公」の絵本は、日本図書館協会の選定図書や北海道学校図書館協会の指定図書に選ばれました。編集者のおかげで素晴らしい絵本を作り上げることができました。

— 「ぶん公」のことなど、絵本や歌を通じて子どもたちに伝えたいことを教えてください。
水口さん…以前、私は小樽の手宮地区に住んでいましたので、実際に「ぶん公」を見たのは一度だけなんです。「ぶん公」は、焼けた家で小樽公園の付近にある消防署の消防員に拾われて、彼らが自炊したご飯の残りを与えられて成長したそうです。当時、まち中に火災報知器が設置されていて、火災区域によってベルの音や出動する消防車が区別されていたのですが、「ぶん公」はその違いを見事に聞き分けて、自ら出動する消防車に乗ったそうです。それからは消防員の一人として、野次馬を散らばらせる番犬として活躍しました。私は「ぶん公」を通じて、動物への愛情と防火意識を育んでほしいと考えています。

小樽啄木会について

— 平成11(1999)年に小樽啄木会会長となられましたね。石川啄木に関心を持つようになったきっかけ、啄木への思いや、受けた影響などを教えてください。
水口さん…そもそも石川啄木を好きになっ

かけは2つあるんですよ。まず1つ目は、子どもたちに教えるために小樽の歴史を勉強していたことです。そして2つ目は、ずっと短歌が好きだったことです。私は、啄木は詩人としてだけではなく、ある種の思想家としても尊敬できるのではないかと思います。彼は日本が他国を植民地とすることに強く反対していました。私は、和人がアイヌ民族にできたことや、アジア太平洋戦争を深く反省するべきだと思っています。そう思わせてくれたのは、啄木の思想のおかげです。啄木が今なお人々に愛されていることも、彼の魅力の一つだと思います。

— 小樽啄木会の主な活動を教えてください。
水口さん…啄木忌を毎年5月に行っています。ちょうどその頃、小樽では桜が満開になるんですよ。啄木忌では、小樽啄木会のメンバーが集まり、啄木の単価を朗詠し、講演を聞いたりしています。なお、平成17(2006)年にしない第3番目となる歌碑を設置しました。そのほか、それまでに啄木関連書籍を発行しています。

小樽のまちの変化

— 今の小樽と水口さんが子どもだった頃の小樽との違いを教えてください。
水口さん…私が子どもの頃、小樽は港町で、戦前には外国の船がたくさん小樽港を行き来していました。しかし、現在では、船が全然来なくなりました。

昔は銀行の支店が20店くらいあったんですけどね。— これからの小樽の課題は何だと考えていらっしゃいますか。
水口さん…やはり、現在の小樽は船の出入りが少ないことが問題だと思いますね。これは港町として致命的だと思います。海外との貿易をもっと盛んにすることで小樽のまちがにぎわっていけば良いと思っています。例えば、ロシアとの貿易を活発にしていけるのも良いと思いますよ。海外に向けた観光船もあるとさらに良いです。あと、小樽には工場が少ないですね。比較的平地の多い銭函にさらに工場を誘致すれば、小樽に移住してくる人も増えるのではないのでしょうか。

若い世代に伝えたいこと

— 最後に、この記事を通して若い世代に伝えたいことはありますか。
水口さん…何ととっても、戦争だけは二度としてほしくないですね。戦争では勝っても負けても、良いことなんて一つもないのです。私は東京の焼け野原や戦災孤児を何人も見てきましたので、平和だけは絶対に守ってほしいです。

まとめ

— 子どもたちに防災意識や動物への愛情を持ってもらいたいという思いで「ぶん公」の絵本をつくっ



インタビューの様子



消防犬「ぶん公」の像

チーム 18
李格瑞・齋藤愛梨・坂本愛莉・大海寺宏太

小樽と芸術

よこやま ふみよ
横山文代さん

画家・白百合会友



プロフィール

小樽市出身。高校時代に週刊マーガレット増刊号で少女漫画家デビュー。卒業後、同市専属レギュラーとなる。中学時代から志してきた油彩画家を目指し、32歳で独立。札幌、東京、小樽で現在までに47本の油彩画個展を開催。平成19年（2007）年から北海道新聞で「しりべし旅日記」、「ぶらり街角」のイラストを担当。現在では同紙で「ゆめ旅スケッチ」5年目を連載中。小樽企業キャラクターデザインも手掛ける。

私たちのチームは、漫画家として活動後、画家の道に進んで現在全国で活躍されている小樽出身の画家・横山文代さんに、画家になるまでの経緯やこれからの小樽への思いなどを伺った。

漫画家になつたきっかけ

— どうして漫画家になられたのでしょうか。
横山さん… 中学校の頃、油絵を描いていました。世界中の名画を見てデッサンやクロッキーばかりしていました。その後、高校生になって、東京の美大を目指すため受験勉強をしている中で、なんだか息苦しくなってきたんです。このままでもいいのかなって思っているうちに自己表現がなくなってきました。それでいまの自分にしか描けないものがあればいいなと思って、自分の憧れであった冒険と学園生活をテーマにした漫画を描いたんです。でも、美大に行くことは家族みんなから反対されていたので隠れて描いていました。漫画を描くことは一種のストレス解消だったんですね。ある時、父に見つかってそんなに夢中になっているが、大学受験と比べて本当に価値があるのかということ、父が原稿を持って出版社に行ったんです。そこで出版社の方に、やる気があるなら卒業まで頑張ってみるのも一つの道だと言われたことがきっかけです。

漫画から油彩画家へ

— なぜ油彩画家に転向したのでしょうか。
横山さん… 漫画家になって10年くらい経ってフ

すので、まだあまり浸透していないのですが、これからうまく宣伝して、新しい小樽の顔になっていったらと思っています。

商大生へのメッセージ

— 商大生に伝えたいことはありますか。
横山さん… 大学生が地域と密接な関りを持つことで、小樽全体が明るくなって、活性化していくと思います。商大生の存在に小樽のまちが元気づけられているのではないのでしょうか。若い人が小樽へ来てそこで学んでいくことが小樽を支え、勇気づける大切な役割を果たしていると感じますね。ここで学んで外へ出て、いつか帰ってきてほしいと思います。

まとめ

— 今回のインタビューの中で、横山さんは画家としての思いやこだわり、これからの小樽への思いなどを詳しく聞くことができました。また、インタビューを通じて私たち小樽商科大学の学生が小樽の活性化に少しでも貢献できていることを実感できました。絵を描くことを通じて小樽の方々との繋がりを大切にしている横山さんから人との関わり的重要性を学んだ。

ンもついていた頃、集英社の研修旅行でヨーロッパに行つてルーブル美術館に行つたんですよ。そこで中学生の頃に見た絵の本物を見て、何世紀も前に自分と同じ人間が描いたものだということが生々しく伝わってきたんです。それで私は今まで何をやっていったんだろうという思いが生まれて、仕事としてやるんだたらこういう作品を残したい、という衝動に駆られたんです。それからは画家になるという夢が生まれて漫画家活動に身が入らなくなつたので、漫画家の仕事を中断しました。

絵画のテーマ

— 横山さんはどのような絵を描いているのでしょうか。
横山さん… 私は絵を描く時には北海道の自然と光をテーマにしています。主に北海道の風景を描いているんですが、今は道外の仕事が多くなっています。でも、北海道の人は北海道の絵が好きなので道内の画家はあまり道外の絵を描かないんですよ。私はあえて道外も絵に描いて魅力を伝えたいと思っていますので、道外でも活動するようになりました。

南樽市場のキャラクター

— 平成14（2002）年に南樽市場のキャラクターを手掛けられたそうですが、そこでの仕事はいかがでしたか。

横山さん… 今まで触れてこなかった考えの人たちと出会えたという点でとても良い社会勉強になりました。



インタビューの様子



横山さんの絵画のポストカード



南樽市場のキャラクター、みなみちゃん

チーム19
竹内大和・久光智也・福屋千遥

眠らないまち、小樽

よねばやし ひでお
米林 榮夫 さん
元小樽倉庫株式会社常務取締役



プロフィール

昭和5(1930)年、小樽市豊川町生まれ。同23年、小樽経済専門学校へ進学。翌年、学校制度改革により小樽商科大学に1期生として入学。卒業後、同28年、当初の大卒社員として小樽倉庫株式会社に入社。関連会社(中央トラック株式会社)の設立にも関わる。小樽の倉庫業を物流業へと発展させ、全国へ支店を拡大させ会社への成長に努めた。平成8(1996)年、同社常務取締役を最終職務として退職。現在は、英語を活用し文通を行うなど様々な活動をしている。

小樽倉庫のロジスティックカンパニー化

—小樽倉庫と中央トラックの関係をお聞かせください。
米林さん…昭和26年頃から苫小牧港の開発が進んでいまして、早くから小樽港への危機感を感じておりました。周りの倉庫関係者は「小樽は良港だ」と言っていました。実際は平地が少なく日本海側で地理的には不利でした。そんな中でも自分の会社が生き残ることを考えて、中央トラック株式会社設立を提案しました。産地から消費地までの輸送と保管業務を一貫し、効率化を図ったのです。ロジスティックカンパニーを目指したということですね。営業部門の方の力もあり、同34年に同社が設立しました。もしこの会社がなかったら、今の小樽倉庫株式会社は全く違った会社になっていたかもしれないですね。

小樽倉庫株式会社の成功の秘訣

—小樽倉庫株式会社での業務を長く続けてこられた秘訣と成功要因はなんですか。
米林さん…小樽で働きたいという希望がかない、常に「会社をよくしていきたい」という信念のもと働けるだけ働き続けようと思っていました。新入社員の際にこつそりと三菱倉庫株式会社へ赴き、組織系統などの近代的なことを学んだことがあります。それを小樽倉庫にもぜひ取り入れたいと言ったところ、上司は「自由に変えていい」と言ってくれました。そうして小樽倉庫の近代化が進んだのです。理解ある上司や、営業部門の方など会社に関わるすべての方たちの協力のおかげで、常にインスピレーションが

私たちのチームは、小樽倉庫株式会社で常務取締役を務められた米林榮夫さんにインタビューさせていただいた。今でも受け継がれている同会社の発展に様々なかたちで貢献した米林さんに、小樽倉庫での仕事や商大についてなど、様々な興味深い話を聞かせていただいた。

生い立ちと入社までの道のり

—小樽倉庫入社までの道のりをお聞かせください。
米林さん…私は、小樽の手宮生まれの手宮育ちで、現在は東雲町に住んでいます。自らの不動産管理のこともあり、小樽商科大学卒業後は小樽に就職したいという希望もっていました。大学4年生の夏休み、当時の大野学長と個人的にお会いする機会があったことがきっかけで、小樽倉庫株式会社の社長にご紹介いただき、入社につながりました。

小樽経専から小樽商大へ

—商大1期生ということですが、今の商大との違いや様子を教えてください。
米林さん…私は小樽経済専門学校生として1年間を過ごしましたが、翌年、学校制度改革がありました。その時に試験を受け直して小樽商科大学1期生として入学し、4年間勉学に励みました。今の違いはやはり勉強方法でしょうか。当時、パソコンはもろろなくてスライドも存在しないため、真剣に先生が言った文章を書いていました。学科にも分かれてはいませんでしたので、法学、金融など

これからの小樽について

—小樽を活性化させるためにどのようなことをしたら良いと思いますか。
米林さん…やはり観光に重点をおくことが一番良いと考えています。一昔前の、夜でも光が溢れていた頃の活気ある小樽と違うということは、時代の流れでは仕方がないことです。しかし、小樽には歴史があります。現在の観光客も堺町などにある歴史的建造物の写真を撮っている姿をよく見かけますよね。観光地ということでは歴史の建造物はほとんど売店になってしまっています。当時の姿は外観のみとなっています。そこで、小樽の歴史をもっと知ってもらうために、内装も当時の様子を再現し、観光資源にしていくといいですね。また、当時の名称や用途を紹介することで、小樽を知らない人にも興味を持ってもらえるのではないかと考えます。

現代を生きる若者へ伝えたいこと

—小樽商大生を含む、若者へこれからの社会を生かすために、何を期待しますか。
米林さん…戦後は占領軍の方針で戦前の日本のすべてが悪であると植え付けられていました。しかし、今の学生は「日本は悪い国だ」と言う人はひとりもいないですよ。あなた方はいま幸せですよ。若者は、自分の国に誇りを持ち、あなたたち若

全分野の専門知識を学びました。当時でも第二外国語の選択があり、種類はフランス、ドイツ、中国、スペイン語で、私はスペイン語を履修していました。私の在学中、一度外国語劇が小樽市公会堂で開催されました。今でもスペイン語のセリフの一部を覚えていますよ。楽しかったです。今の商大生はほとんどが道内出身ですが、当時は30〜40%が全国各地から来た学生で、道内以外の話も聞きました。

小樽倉庫株式会社での仕事

—小樽倉庫ではどのようなお仕事をされていたのですか。

米林さん…総務の仕事を担当していました。当時この会社は規模があまり大きくなかったため、会社組織管理、経理、金融、人事関係の仕事も総務が担っていました。商大出身ということもあり、欧米との輸出入業務や英文書類の作成、輸出貨物の船積みまでの業務を任せられました。

眠らない小樽港

—小樽港の最盛期についてお聞かせください。
米林さん…船積書類を書いていた時の小樽港は、24時間人通りが絶えることがありませんでした。銀行や税関、港湾関係会社など昼も夜も関係なく、港全体が殷賑を極めていましたね。仕事業務が朝4時まで続き「超多忙」な日々でしたが、小樽がそのくらい活気にあふれている町だと思つと、仕事のやりがいを感じました。

まとめ

—今回、米林さんへのインタビューを通して、小樽倉庫は物流業が盛んだった頃、どのように活躍していたのか、昔の小樽はどのような様子だったのかを知ることができた。力強いお言葉に当時の小樽の活気あふれる姿が想像できた。小樽の歴史を知ること、これは、現在の小樽を知ることにもなる。商業地として栄えていた頃の歴史や建造物をどう残し、生かしていくのが、今後の小樽が観光業で生きていくための課題だということをお話から改めて考えるきっかけとなった。



インタビューの様子



旧小樽倉庫

チーム20
吉川 絢夏・石川 朋佳・西淵 千歩

「商店街のひとに学ぶ」

「都通り商店街の歴史・現在・未来」



公開座談会のちらし

- 日程…2019年3月13日(火) 18時半～
- 会場…稲穂二丁目会館(小樽市稲穂2丁目12-22)
- 主催…小樽商科大学グローバル戦略推進センター 研究支援部門 地域経済研究部
- 後援…小樽都通り商店街振興組合、小樽市商店街振興組合連合会、小樽市
- 報告…「北前船日本遺産による商店街の活性化」都通り商店街、堺町商店街での取り組み」小樽商科大学本気プロ「日本遺産による小樽の活性化」チーム
- パネルディスカッション…テーマ「都通り商店街のこれから」(パネラー)鈴木創氏(小樽都通り商店街振興組合理事長)、岩永尚己氏(株式会社岩永時計店)、高田嗣久氏(メガネのタカダ)、鳴海大氏(株式会社ぎんざ)、二木久美子氏(小樽 ANI ME PARTY 事務局長)
- (コメント) 赤石達郎氏(小樽サンモール商店街振興組合)、大澤尚詞氏(小樽都通り梁川商店街振興組合)、武藤修氏(小樽花園銀座商店街振興組合)、山本一彦氏(小樽堺町通り商店街振興組合)、小樽商科大学本気プロ「日本遺産による小樽の活性化」チーム
- 司会進行…後藤英之(小樽商科大学グローバル戦略推進センター准教授)
- ファシリテーター…高野宏康(小樽商科大学グローバル戦略推進センター学術研究員)

通りのシンボルにもなっている榎本武揚こそが、その最重要人物でした。当時、北海道は大きな岐路に立っていました。日本の工業化が進む中、最も重要な資源でもある幌内炭鉱で掘り出された石炭をどうやって本州へ運ぶか、その運搬のための鉄道をどこに引くべきか、日本政府は、太平洋側から積み出すか、日本海側から積み出すかの選択を迫られていました。アメリカから来た専門家のケブロンは太平洋側へのルートを主張しましたが、榎本武揚は日本海側、小樽へと運ぶルートを支持し、最終的に榎本の案に決定しました。こうして、明治13(1880)年に手宮と幌内を結ぶ線路が完成しました。

榎本武揚は当時開拓使の長官だった北垣国道と共に現在の稲穂町周辺に当たる土地を購入。街作り会社「北辰社」を設立し、土地を開拓分譲して行きました。龍宮神社はこの頃に建てられた神社です。1904年、小樽駅が開業(正式名が「小樽駅」となったのは1919年のことです)。ここから駅前商店街として、駅周辺に店が立ち始めます。ただし、当初発展したのは、手宮線の終点でもある手宮周辺で、それが後に現在の色内町方面へ、梁川商店街へと繁華街の中心が移動して行くこととなります。

都通りの黄金期

現在の「都通り」に当たる地域は小樽の駅前商店街として発展し始め、大正9(1920)年に「稲穂電気

基調講演

都通り商店街の歴史と未来

すずき はじめ
鈴木創氏

小樽都通り商店街振興組合理事長



プロフィール

昭和35(1960)年、小樽生まれ。ロース幼稚園、青菁中学校、潮陵高校卒業。同53年、東京理科大学物理学科入学。同54年、中野サンプラザでポップ・マーレーのライブを見て以来、多くのライブを観覧。同56年、(株)ジエコー入社。トヨタ向けの電装モータを設計。同59年、バリ島へ行く。その後、トルコなど各国を旅行。平成2(1990)年、小樽へ戻り、結婚。実家の(旬)スキ用品店の店主となる。その後、ベネトンを立ち上げる。同12年、HP「ロック世代のポピュラー音楽史」(現「ポップの世紀」解説。同18年、音楽史の本「音楽大全」洋泉社出版。FMおたるの番組を担当。同31年、小樽都通り商店街復興組合理事長に就任。

館通り町内会)として正式に名前がつけられました。その名の元になった「電気館」は、当時、娯楽の殿堂として小樽の中心になっていた映画館 & 商業ビルで、現在もその建物の一部は「ぎんざ」として営業しています。映画館としての電気館は1980年代初頭まで営業していました。1923年、小樽運河が完成し、港湾都市、貿易都市としての小樽の黄金時代が本格化。電気館通りもその影響でさらなる発展を遂げることとなります。1931年、懸賞募集によって選ばれた「都通り」が採用され、「電気館通り」から「都通り」へと名称が変更されます。

太平洋戦争が始まると、多くの商店が疎開し、商店街は閑散としますが、戦後はいよいよ小樽市内の賑わいの中心は都通りになって行きます。1950年代は、日本全体が高度経済成長の波に乗っていたこともあり、商店街はさらに賑わいを増して行きます。1964年、東京オリンピックの年、正式の商店街組織として「都通り商店街振興組合」がスタート。1966年、道内では狸小路に続く2番目のアーケードが、都通りに完成。完成記念レコードとして、都はるみと杉良太郎のデュエット曲が作られています。

マイカル小樽による激震

1960年に小樽で生まれた僕は1978年に大学に入学し東京在住となり小樽を離れました。大学

平成の終わりにあたり

「平成」が終わり、新しい時代になろうとしています。考えて見れば、小樽の歴史にとっても、平成の終わりは一つの区切りかもしれません。歴史を振り返ると、「昭和」から「平成」へと変わる中、小樽の街は商業都市から観光都市へと大きく変わってきました。新たな時代の小樽は、国内よりも国外からの観光客が多いグローバルな観光地になろうとしています。

そんな中、僕は小樽の中心商店街である都通り商店街の理事長を任されることになりました。ちょうどそのタイミングで小樽商科大学の高野先生から「商店街の歴史と未来」について、講演の依頼を受けました。苦境が続く様々な商店街の歴史の多くは、すでに忘れ去られつつあり、その生き証人も残念ながらこの世を去りつつあります。その意味でも、今その記憶を整理することも価値があると思うので、ちょうど良い機会でした。そこで、小樽市の駅前にある都通り商店街の歩みについて振り返りながら、今後についても考えてみようと思います。

榎本武揚と小樽の黄金期

都通り商店街の歴史について、まずは現在の場所に商店街が誕生することになったきっかけから始めようと思います。時代は 19世紀末の明治時代。都卒業後も、関東で就職し、小樽に帰ってきたのは1990年のことでした。その間、小樽の人口は減り続け、経済的にも斜陽化は進んでいましたが、まだまだ小樽の商店街には活気がありました。さらに僕が不在の間、小樽では運河保存運動が大きな盛り上がりを見せており、それが観光都市小樽を誕生させるきっかけとなりました。1991年、バブル景気が終わろうとする頃、小樽の商業界に激震が走ります。小樽築港地域に巨大商業施設「マイカル小樽」の建設が発表されたのです。600億円の投資と市による50億円規模の基盤整備により、34万平方メートルの巨大な商業施設ができるという計画でした。開業後、小樽中心部の商店街の売り上げは、30%から50%程度落ち込むだろうという予測も発表されました。

この際、小樽商工会議所は、早くからマイカル進出を受け入れます。商店街に対しては、「このまま黙っている」と、商店街は壊滅する可能性が高いので、やる気のある店はマイカルへの移転を考えてほしい」と説明。店主の子弟がマイカルで研修を受けるシステムを利用するよう薦めました。当然、多くの商業者がこの対応に反発し、都通りの店主の多くがこの時期に商工会議所を脱会しています。当時、小樽市以外でも同じような大規模商業施設の建設が進んでいましたが、ほとんどの街の商工会議所は商店街と共に建設反対の立場をとっていました。その意味では小樽は例外的な存在でした。この時期、市役所が一企業

のために税金を使って基盤整備を行うということに
 対し、違法ではないかという訴訟も起こされました
 が、市も商工会議所も計画を粛々と進めます。建設を
 止めることが困難なことは明らかでした。

様々な対抗策

市民の立場から、「マイカル小樽」の誕生により、
 買い物する場所の選択肢が増えることは良いこと、
 という意見も多かったのも事実でした。そうなること、
 これ以上反対運動を続けても良い結果は得られない
 と判断した商店街は、マイカルの出店前に可能な対
 抗策の準備に入ります。そこで都通日も様々な新た
 な取り組みを行います。1996年6月「どっこ
 い、おいらは負けないよ！」をテーマに後志全体の活
 性化イベントを開催します。その中で行ったイベント
 の中には現在も継続している企画があります。「後志
 大収穫祭うまいっしょ市」には後志各地の美味しい食
 が集結。ご当地グルメイベントの先駆だったといえま
 す。その後、都通りでは「しりべしなんでも百姓くらぶ」
 の方々と共同で土曜日恒例の「無農薬野菜市」が始ま
 り、現在に至ります(実行委員会が正式発足し、年間を
 通して開催されるようになったのは2008年)。
 「じゃがいもバケツ一杯100円販売」もこの時から始
 まり、現在もなお続いている企画です。

1998年、当初はお店のトイレをお客様に利用
 しやすいように案内ステッカーを作るところか始
 り、号線沿いを走ると、多くの店がシャッターを閉めた
 状態のままになっています。もし、小樽に「運河」とい
 う歴史遺産や「寿司」など食文化の歴史がなければ、
 駅前を中心とする商店街も同じように消滅していた
 可能性が十分にあったと思います。現在の商店街が
 存続できているのは、観光客の増加のおかげである
 ことは明らかです。では、商店街はさらに観光客を
 ターゲットとして特化して行くべきなのでしょうか？

コミュニティとしての商店街

商店街が観光だけに特化することの危険性は、
 2018年の北海道胆振東部地震の時に思い知らさ
 れました。特に運河周辺の商店街はその影響をもろ
 に受け、大きな痛手を負うことになりました。それに
 比べると、都通り商店街への地震の影響は、予想ほど
 は大きくはなかったように思います。確かに海外か
 らの観光客は減少しましたが、札幌方面からのお客
 様は逆に増えていたかもしれません。

地震があった日、うちの店は休みませんでした。停
 電は二日間にわたりましたが、店内の状況を確認し
 たついでに店を開けていると、お客様が訪れ、普段並
 みの売り上げがあり驚いた覚えがあります。ただし、
 売れたものの中には、キャンドルや電池式のLED
 ランプなどがあり、停電のおかげで売れたものもあ
 りました。近隣のホテルから購入に来たお客様や地
 震の影響を確認に来た近隣の住人など様々な来店が

まった企画の発展形として、商店街の中に市から補
 助金をいただいて「都通りふれあいプラザ」がオーブ
 ンします。この施設は、空き店舗を改装したもので、
 トイレだけでなく観光案内や荷物一時預かり、ク
 リーニングの取り扱いや農産物や手作り品の販売な
 どを行う施設として、この後10年以上続くことにな
 りました。その間、担当者が一名常駐していました。
 この年には、商店街の情報発信のために「都通りかわ
 らばん」が創刊。1997年、クリスマス飾りつけ
 としてアイスクャンドルを制作し、商店街に並べる
 企画をスタートさせます。この2年後、1999年2
 月から「雪あかりの路」がスタートし、アイスクヤ
 ンドルによるディスプレイは2月に変わりました。都
 通りのアイスクャンドルは、「雪あかりの路」の先を
 いったいわけです。

1998年、小樽市内の多くの商店が参加するホ
 イントカード「オタルンカード」がスタートします。
 この企画は、もともと「マイカル小樽」建設に反対す
 る築港ヤード再開反対運動のメンバーとなってい
 た商店主が主体となって研究・実施されました。反
 対運動が行き詰まる中、最も有効と思われる対抗策
 として選択されたのが当時商店街の救世主的存在
 だったポイントカードのシステムでした。当初「オタ
 ルンカード」に参加したのは、155名(225店舗)
 で、当時、その規模で全市的なポイントカードシステ
 ムを導入していたのは秋田市ぐらいしかありません
 がありました。近場の商店に行けば、知人の無事を確認
 でき、停電や水道の状況などが今後どうなるのかわ
 かるのではないかと？そう考えていらした方が多かつ
 たように思います。当日は久しぶりにPMおたるさん
 に出演もさせていただきました。商店街の状況などを報告
 その放送をかなり多くの方が聞いていたことは、そ
 の後わかりました。地域のコミュニティとして商
 店街が求められる役割の重要性はこうした時に明ら
 かになるようです。

近郊客の重要性

1990年代から都通り商店街はお客様のター
 ゲットとして「近郊客」という言葉を重要視して来ま
 した。それは小樽市内の在住者ではなく、同じ後志管
 内の在住者や札幌方面に住んで小樽に定期的に遊び
 に来てくれるお客様のことを指します。そうした「近
 郊客」の方々の中には、札幌の巨大な商業施設ではな
 く、街歩きをしながらの散歩がてらの買い物を楽し
 みにしている主婦層が多くいます。彼女たちは、昼に
 はお寿司などを食べ、3時には甘いものを食べると
 いう日帰りの小さな旅をするついでに商店街での買
 い物も楽しみにしています。

そうした人々は、札幌近隣の主婦だけでなく、道外
 から定期的なやってくる観光客の中にもいらつしや
 います。こうしたお客様を大切にすることが、小樽の
 街にとっては何となく重要なことだと思われま

でした。「オタルンカード」は市の調査によると市民
 の90%が認知するポイントカードとして現在も継続
 しています。

マイカル小樽の開業

1999年3月、ついに「マイカル小樽」が開業し
 ます。小樽はどう変化するのか、駅前地区は、多くの
 街のように空洞化するのではないかと、当初からある
 程度予想されていたことでしたが、商店街よりも先
 にマイカル小樽はすぐに営業的に行き詰まります。
 同じ時期、バブルの崩壊により全国各地に誕生した
 ばかりの巨大商業施設は次々に失速し、その影響で
 マイカル本体が2001年に民事再生法の適用申請
 をして倒産。「マイカル小樽」は、「ウイングベイ小樽」
 と改名して営業を続けますが、赤字を生み出し続け、
 市に対し50億円以上の税金を滞納したままの状態が
 続いています(市民がその負債を抱えているという
 ことです)。2017年、「ウイングベイ小樽」(株式会
 社小樽ベイシティ開発)は負債総額280億円を抱
 えた状態で民事再生法の適用を申請しました(同年
 道内最大級)。

残念ながらマイカル小樽の登場により小樽市内の
 商店街も大きな影響を受けました。市内中心部は、観
 光客の影響もあつて、なんとか持ちこたえたと言え
 ます。しかし、それ以外の周辺商店街は、その店舗の
 多くが消えてゆくことになりました。現在も国道5
 号線沿いを走ると、多くの店がシャッターを閉めた
 状態のままになっています。心にも懐にも余裕のある道内のお客様は
 重要なターゲットになるはずですが、そのことは、昨年
 の地震の際、再認識させられました。「がんばろう北
 海道」というスローガンの影響もあり、道内近郊の主
 婦層の方々が観光地を元気づけようと、いつも以上
 に訪れてくれたりしています。

これからの商店街

様々なことがあつた商店街の歴史の中で、これか
 ら商店街が目指すべきところは自ずと見えてきま
 す。重要なのは、お客様のターゲットをどう考える
 か、そのバランスかもしれません(それぞれの商店街
 によって、その比率は違うはずですが)。小樽市の人口
 が着実に減少する中でも、地域のコミュニティを
 支える存在として貢献を続けることは大切なことで
 す。地域への貢献なくして地方の商店街の存在意義
 はないと思います。小樽の高齢化が進む中、今まで以
 上にお客さまとの対話は重要になり、助け合いの精
 神が必要になるはずですが。

しかし、小樽市内だけでなく日本全体の人口減少
 が止まらないとなると、海外からの観光客もター
 ゲットにしなければ、売り上げの維持は困難になり
 ます。そうなること、観光客のための情報発信や利便性
 の向上はこれからさらに必要になるはずですが。その
 ための取り組みとして、キャッシュレス・システム



都通り商店街に関する年表

1876年 (明治9年)	榎本武揚により龍宮神社建立。
1880年 (明治13年)	手宮～幌内間に鉄道開通。
1895年 (明治28年)	現在の都通り周辺に電灯が灯る。
1904年 (明治28年)	小樽駅舎完成 (ただし、駅名が小樽駅となるのは1919年)。
1914年 (大正3年)	映画館「電気館」オープン。
1921年 (大正10年)	稲電会創立 (稲穂電気館通り町内会の略)。
1923年 (大正12年)	小樽運河完成。
1929年 (昭和4年)	スズキ洋品店、電気館前の仲見世通りで操業 (祖父・鈴木俊之介)
1931年 (昭和6年)	懸賞募集により「都通り」の名前が正式名称に決定。
1941年 (昭和16年)	太平洋戦争勃発。
1945年 (昭和20年)	第二次世界大戦が終戦。
1964年 (昭和39年)	「都通り商店街振興組合」発足。
1966年 (昭和41年)	都通りに道内2番目となるアーケード完成。完成記念レコード「ゆめの都通り / 都通り音頭」(歌：都はるみ、杉良太郎)制作。
1978年 (昭和53年)	都通り内全面カラー舗装化。
1982年 (昭和57年)	映画館「電気館」が閉館。
1993年 (平成5年)	ホワイトアーケード、リニューアル。
1996年 (平成8年)	商店街イベント「どっこいおいらは負けないよ!」開催。後志全体の活性化を目指したイベント「後志大収穫祭～うまいっしょ市～」開催。
1998年 (平成10年)	「都通りふれあいプラザ」オープン。「都通りかわら版」創刊。全市的規模のポイントカード「オタルンカード」スタート。
1999年 (平成11年)	「マイカル小樽」開業。「小樽雪あかりの路」スタート。
2002年 (平成14年)	アーケードのリニューアル完成。榎本武揚プロジェクトスタート。
2008年 (平成20年)	「無農産野菜市」5月～10月毎週土曜日開催となる。
2014年 (平成26年)	「小樽アニメパーティー」スタート。
2018年 (平成30年)	「まちゼミおたる」スタート。「ハロウィーン・イベント」開催 (サンモール一番街、梁川商店街と共同開催)。

小樽全体の魅力発信

の導入、ITを利用したお店による手荷物預かりシステムの導入などの検討を始める必要があると考えています。

もちろんいつどうなるかわからない海外の観光客とは別に、国内や札幌など国内近郊のお客様、リピーターとして訪れて下さる「近郊客」の方々へのさらなる魅力の発信も必要です。最近、都通りのイベントでは内容によっては、札幌の西区にチラシを入れることもあります。商店街としてのネットによる情報発信も今まで不十分だったので、今後はそのあたりも改善するべきと考えています。

様々な客層をターゲットにすることは、一歩間違えると中途半端な店が並ぶ商店街になる可能性もあります。何かの特化しないと注目されないのが現代社会の常識かもしれません。しかし、昔ながらの居心地の良いある意味「昭和的な商店街」というイメージは今や日本から失われつつあります。そして、そんな商店街が魅力的という声をよく聞きます。もし、それが実現できれば、市民だけでなく観光客にも魅力的だし楽しいはず。そんな商店街を目指したいと考えていますが、そこまでできないとこれからの商店街は生き残れないようにも思えます。「個店はあくまでも個性的であるべき!ただし、それらが集まった商店街は、フランスがとれていること!」が重要だと思えます。

これまで小樽が観光都市としての地位を築くこと

ができたのは、峯山富美さんを中心とする運河保存運動のおかげだったと言えます。しかし、その後も、様々な人々が小樽の魅力を生み出す努力を続けてきました。「寿司屋通り」を生み出し発展させたお寿司屋さんたちやガラスの街のイメージを作り出した北一硝子さんなどの貢献も忘れてはいけません。最近では、あなか焼そばの仕掛け人さんたちや、似鳥美術館の貢献にも感謝です。20年の歴史を刻んだ「雪あかりの路」、21世紀に登場した「小樽アニメパーティー」は、今後も継続するだけでなく、より広く情報発信を行うことで、国内、国外からより多くの観光客を呼び込めるイベントとしてさらに発展できるはずです。

そうした観光客向けのイベントとは別の地域密着型イベントも、商店街としてのバランスをとるために重要だと思えます。2018年からスタートした「街並みゼミ」は地域密着のイベントとして、地域全体の活性化のための新たな魅力作りの可能性を秘めています。個々の店の主がそれぞれの才能・技術・個性を使って市民に何かを教える。そこから、地域貢献型商店街の新たな発展の可能性が見えてくるかもしれません。同じく2018年、サンモール商店街、梁川商店街、都通り商店街の共同開催で行われた「ハロウィーン・イベント」も、地域の子供たちと商店街の交流の場として、今後も続けるべき企画だと思えます。昨年は50名の参加でしたが今年はさらに拡大させられればと思います。

最後に感謝

最後に「マイカル小樽」の開業に、僕自身が感謝していることを告白しなければなりません。1999年、巨大商業施設の誕生により、店がどう考えても今更でより暇になることは明らかでした。では、店が暇になるなら、その間に何かやろうと思いついた僕は、当時、ブームになりつつあったホームページを作ろうとノートパソコンを購入。1999年にその制作を開始し、2000年にサイトが正式にスタートしました。当時は、こうしたサイトが珍しかったこともあり、かなりのアクセス数を獲得。本やYAHOOなどで、お勧めサイトとして紹介されたりしました。ついにはそれがきっかけで出版社の方から声をかけていただき、「音魂大全」という本を出版することにもなり、その他にもBS放送のジャズ番組に資料提供をするなど、本業以外の部分で仕事をする機会を得ることもありました。地元FMおたるさんでも5年ほど番組を担当させてもらったりしました。今思うと、マイカル小樽の開業がなければ、そうした体験もできなかったかもしれません。とりあえず、常に何かに挑戦していくことは大切なことだと改めて思います。

小樽のひとに学ぶ商大生



小樽のひとに学ぶ【2018年度版】 ～小樽商大生が小樽のひとにインタビュー～

編集・発行 国立大学法人小樽商科大学グローバル戦略推進センター
研究支援部門地域経済研究部

〒047-8501 北海道小樽市緑3丁目5番21号

電話 0134-27-5482

H P <http://www.otaru-uc.ac.jp>

発行 平成31年3月